

富士宮市文化財調査報告書第36集

滝戸遺跡Ⅱ

主要地方道富士宮芝川線緊急交通改善事業工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

富士宮市教育委員会

滝戸遺跡Ⅱ

主要地方道富士宮芝川線緊急交通改善事業工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

富士宮市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、静岡県富士宮市野中615番地先に所在する庵戸遺跡の第VI次発掘調査をまとめた『庵戸遺跡II』である。
- 2 発掘調査は、静岡県富士土木事務所の計画による主要地方道富士宮芝川線緊急交通改善事業工事に先立って実施したものである。
- 3 発掘調査は、平成18年4月26日及び同年6月29日に実施された静岡県教育委員会文化課による確認調査成果を受け、富士宮市教育委員会文化課が行ったもので、平成18年10月5日から11月30日の期間で実施された。対象面積約160m²であった。
- 4 整理作業及び本書刊行事業は、富士宮市教育委員会文化課が、平成18年11月13日から平成19年3月23日まで実施し、平成19年3月23日に本書を刊行して終了した。
- 5 発掘調査から報告書刊行に関わるすべての事業は、静岡県富士土木事務所より富士宮市教育委員会が委託を受けて実施した。
- 6 発掘調査に伴う基準点測量等業務委託は、株式会社フジヤマに委託した。
- 7 本書の執筆は、以下のとおり行っている。

第I章 渡井英誉（富士宮市教育委員会文化課学芸員）

第II章1～3 佐野恵里（富士宮市教育委員会文化課嘱託員）

第II章4 渡井英誉・佐野恵里

第III章 渡井英誉

第IV章1 (1)～(3)・(6)・(8)・(9)、2 (1) 佐野恵里

第IV章1 (4)・(7) 渡井英誉

第IV章1 (5)、2、3 澤柳幸司（富士宮市教育委員会文化課嘱託員）

第V章 渡井英誉

また、本書に掲載した写真は、渡井・佐野・澤柳が分担して担当している。

- 8 本発掘調査の体制は、以下のとおりである。

教育長 大森衛

調査担当者 渡井英誉 佐野恵里 澤柳幸司

発掘調査 勝俣秀雄 阿部稔男 佐藤法夫 園田勝 古郡善明 渡辺敏雄

大平美奈子 川島ひとみ 山崎美美子

整理作業 渡辺麻里 佐藤節子

- 9 発掘調査にあたり、ご指導やご協力いただいた。記して感謝申し上げる次第である。
(敬称略)

植松章八、小室博、曾我博、静岡県教育委員会文化課、

静岡県富士土木事務所、富士宮市立第三中学校

- 10 本書の編集・印刷・出版に関わる事務は富士宮市教育委員会文化課が行った。

- 11 発掘調査に関する資料はすべて、富士宮市教育委員会で保管している。

凡　　例

1 造構の名称は、以下のとおり省略記号で表している。

- 住居など建物跡 … SB
- 土坑 … SK
- その他集石など … SX

2 土層観察表及び土器観察表に記載する色調は、すべて、『新版標準土色帖』（農林省農林水産技術会議事務局監修）を参考にしている。土器の色調は、破片を最も広く占有する色調を示している。また、土器観察表の胎土について記載は、以下の略である。

- 英・長 … 石英・正長石・斜長石などの無色鉱物
- 有 … 黒雲母・角閃石・輝石・かんらん石などの有色鉱物
- 砂 … 砂粒
- 赤 … 赤色の粒子
- 多 … 多量
- 少 … 少量
- 微 … 微量

3 掘図中のトーンは、以下を示している。



搅乱



焼土



使用痕敲き (石器)



使用痕磨り (石器)



整形痕

4 掘図中の遺物のスケールは、弥生土器は全て $1/3$ 、縄文土器は器形を復元できたものについては $1/4$ 、拓影図及び器形の復元が困難なものについては $1/3$ で掲載している。また、土器片円盤及び土器片鍤は $1/3$ 、石器は、石鑿は $3/5$ 、石棒は $1/4$ で掲載し、それ以外の石器については全て $1/3$ で掲載している。

目 次

第Ⅰ章 環境	
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	4
第Ⅱ章 調査の経緯と経過	
1 調査に至る経緯	7
2 調査の経過	10
3 調査区の名称	10
4 層序	10
第Ⅲ章 弥生時代	
1 遺構	12
(1) SB 1	16
(2) SB 2	16
(3) SB 3	17
(4) SB 4	17
(5) ピット	18
2 遺物	18
第Ⅳ章 繩文時代	
1 遺構	21
(1) SX 1	21
(2) SX 2	21
(3) SX 3	21
(4) SX 4	23
(5) SX 5	24
(6) SX 6	24
(7) SK 1	26
(8) SK 2	26
(9) SK 3	27
2 遺物	27
(1) 土器	29
(2) 石器	37
(3) 土製品	42
第Ⅴ章 まとめ	45
1 繩文時代	45
2 弥生時代	46
(1) 遺跡の年代	46
(2) 弥生時代集落の動向	47

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡分布図	2
第2図	地質図	3
第3図	調査区の位置	7
第4図	グリッド配置図	8
第5図	調査区全体土層図	9
第6図	弥生時代遺構検出状況図	12
第7図	弥生時代遺構全体図	13
第8図	S B 1・P 1・P 2 実測図	14
第9図	S B 2・S B 3・S B 4・P 1・P 4 実測図	15
第10図	弥生土器実測図	19
第11図	縄文時代遺構分布図	22
第12図	S X 1 実測図	23
第13図	S X 2 実測図	23
第14図	S X 3 実測図	23
第15図	S X 4・S K 1 実測図	24
第16図	S X 5 実測図	25
第17図	S X 6 実測図	26
第18図	S K 2 実測図	26
第19図	S K 3 実測図	26
第20図	縄文時代土器実測図 1	28
第21図	縄文時代土器実測図 2	29
第22図	縄文時代土器実測図 3	31
第23図	縄文時代土器実測図 4	32
第24図	縄文時代土器実測図 5	34
第25図	縄文時代土器実測図 6	35
第26図	縄文時代土器実測図 7	36
第27図	縄文時代石器実測図 1	38
第28図	縄文時代石器実測図 2	39
第29図	縄文時代石器実測図 3	40
第30図	縄文時代土製品実測図	43
第31図	富士市市場遺跡出土土器実測図	47

挿 表 目 次

第1表	弥生土器観察表	53
第2表	縄文土器観察表	53
第3表	石器観察表	55
第4表	土器片円盤観察表	55
第5表	土器片錐観察表	56

図 版 目 次

図版1	調査区近景／図版2	S K 2 検出状況
図版3	調査区全景／図版4	S B 1 検出状況
図版5	S B 2・3 検出状況／図版6	S B 4 柱穴調査状況
図版7	S X 1 検出状況／図版8	S X 1 半裁状況
図版9	S X 3 検出状況／図版10	S K 1 検出状況
図版11	S X 5 検出状況／図版12	S X 5 調査状況
図版13	S X 6 検出状況／図版14	採集土器（第10図9）
図版15	出土縄文土器（第22図46）／図版16	出土縄文土器（第25図75）
図版17	出土石器／図版18	S K 2 出土石器（第29図）

第Ⅰ章 位置と環境

1 地理的環境

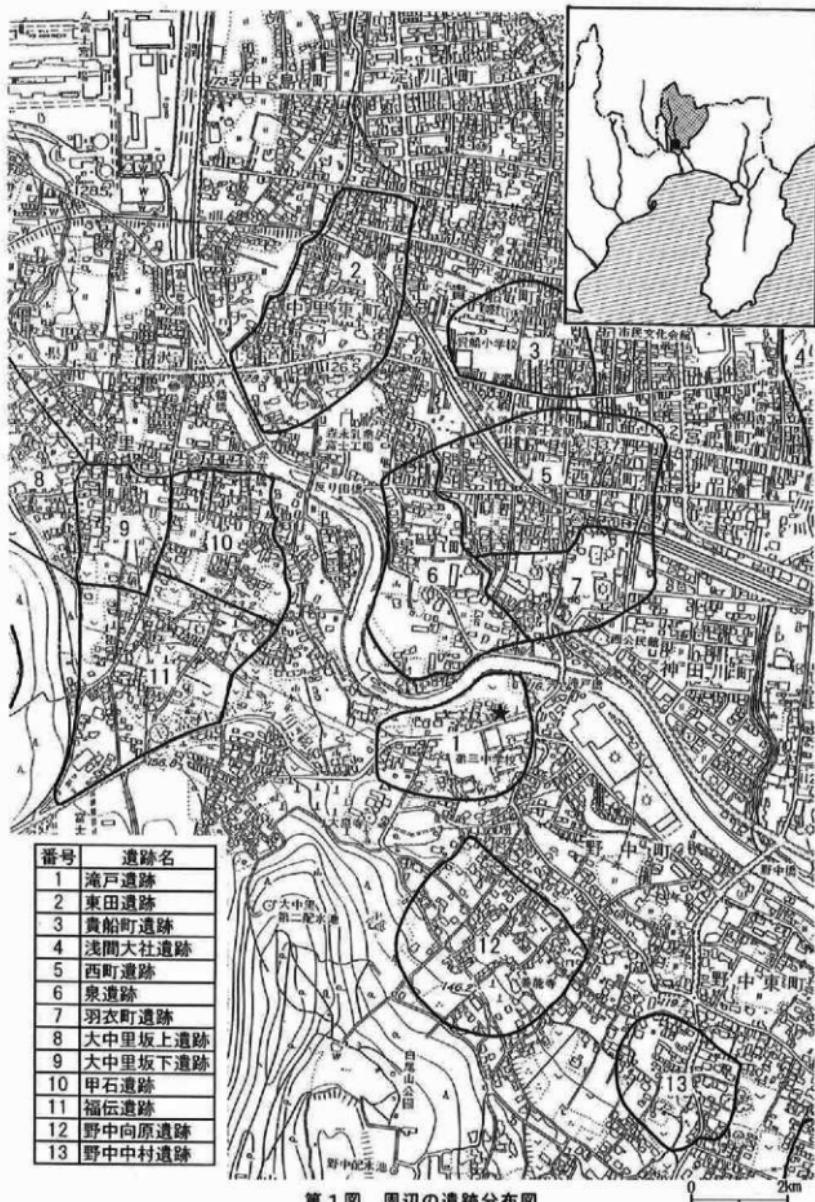
滝戸遺跡は、富士山の大沢をその源とする潤井川の左岸に展開する丘陵上に位置する遺跡である（第1図）。駿河湾の最深部から11kmほど北上する山間地にあるこの遺跡は、八ヶ岳などにその源流の求められる富士川がその西側を南流する富士山西南麓に広がる。

富士山西麓～西南麓にかけては、羽鮈丘陵や星山丘陵の独立丘陵が富士山の裾に沿って横たわっている。地質的な環境では、古富士火山の泥流層が基盤となる星山丘陵とその星山丘陵と北側の羽鮈丘陵とを画する新富士火山の溶岩流（富士宮溶岩流）の星山丘陵に接する東端部分に遺跡がある（第2図）。この古富士火山の泥流層と新富士火山の熔岩流の地質的な違いは市内各地に湧水地を生み出す要因となるものであり、滝戸遺跡の周辺においても、その北側に「大中里湧水群」が広がっている。現在でも豊富な湧水量を誇る大中里湧水群のひとつである「よしま池」は、滝戸遺跡の北側500mに位置している。

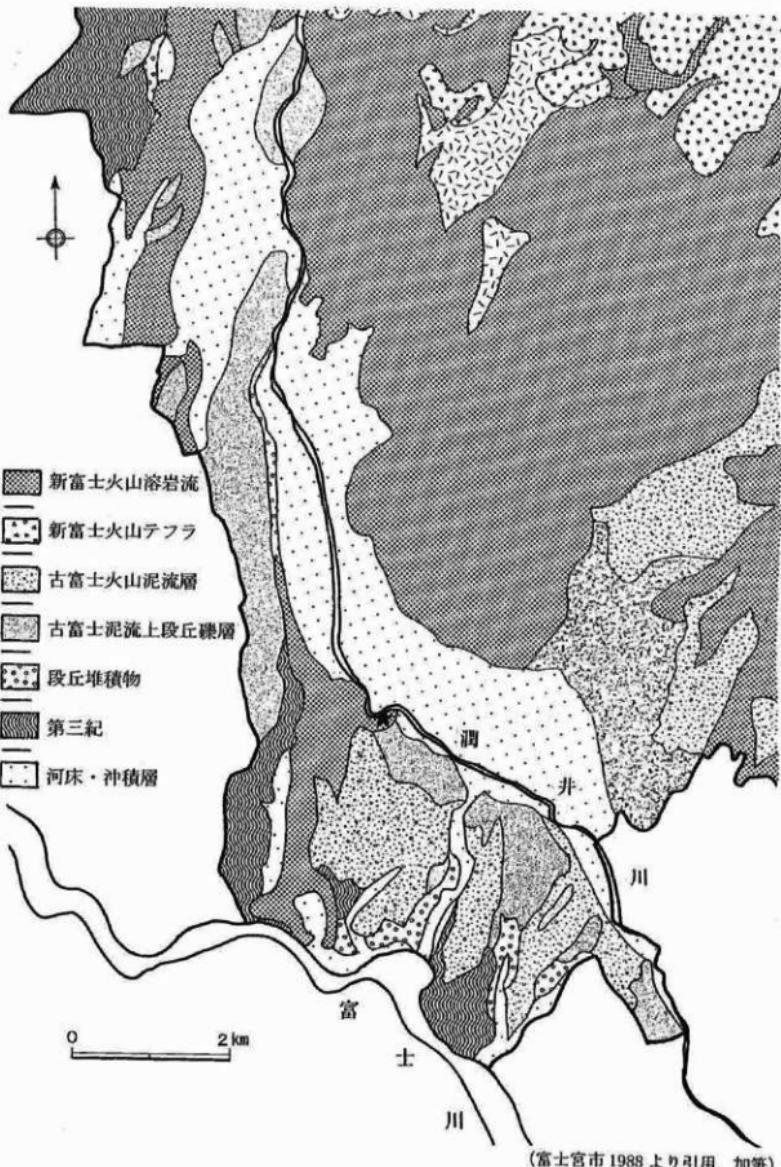
滝戸遺跡の東側を南流する潤井川は、市内で富士川に次いで二番目の規模を誇る大型河川である。この川は、大宮断層崖下沿いに市域を東西に二分するように流れおり、地形環境の大きな違いを示す指標となっている。潤井川左岸の大半は、富士山により形成された斜面地形を示し、その裾部分を中心に雑壇状に連続する丘陵が発達している。また、この区域には、潤井川の作用による沖積地が広がり、その中に微高地が点在している。特に、新富士火山の溶岩流の末端部分では、その裾に沿うように扇状地堆積物による微高地が、発達している。

潤井川の右岸は、河岸段丘と丘陵が発達しており、芝川～富士川と潤井川に挟まれて平坦な丘陵が南北方向に展開している。この丘陵部は、古富士火山の名残をよく残しており、南北方向の丘陵を分断する貫戸谷、星山谷、沼久保谷、安居山谷のような谷地形を見ることができる。この中で、安居山谷伝いには富士宮溶岩流が流れ込んでおり、特異な丘陵地形を呈しているが、この滝戸遺跡もその中のひとつにおいて造営されている。つまり、古富士火山の泥流層を基盤とする星山丘陵の北端部において新富士火山の熔岩流を基盤とした舌状の台地上に築かれた遺跡であると言えるのである。滝戸遺跡が占有する台地は、西側に白尾山が聳え、北側から東側をこの場所で南から東に大きく流路を変換する潤井川により画されている。南側も白尾山に向かう谷が大きく入り込み特徴的な独立性の強い舌状台地の様相を示すものである。但し、台地自体は、西側から東側の潤井川に向かって緩やかな傾斜を示しており、月の輪平遺跡などが占有している河岸段丘として形成された通常の舌状台地とはその様相を違えている。この特徴的な環境は、遺跡の立地にも影響を及ぼすもので、滝戸遺跡は、各地点において時代や種類が異なる遺跡形成がなされているのである（富士宮市教育委員会1997）。

潤井川は、この滝戸遺跡の周辺で大きくその流路を南から東へ変え、田子の浦港から駿河湾へ流れ込むものである。流路は、富士山側の新富士熔岩流により形成された丘陵崖と羽鮈丘陵から星山丘陵にかけての断層崖とに規制されているのであるが、羽鮈丘陵東側では、沖積地内で流れを大きく変えているのに対し、南側に展開する星山丘陵側では、ほ



第1図 周辺の遺跡分布図



第2図 地質図

ば丘陵に沿うような流路を示している。この分岐点となる部分が、ちょうど、星山丘陵を縦断する大きな谷の中で安居山谷に流れ込んだ新富士火山の熔岩流の東端部分に当たり、潤井川に対して直接影響を及ぼしたのが、この滝戸遺跡の周辺の地形なのである。そのため、この地点で、潤井川は大きく南側へと蛇行して、滝戸遺跡の占有する舌状台地形成の要因となると共に、その左岸の沖積地内に滝戸遺跡と対峙する舌状の微高地が形成されている。

2 歴史的環境

富士宮市における遺跡は、富士山の噴火に影響されて、その消長を示すものである。それは、山間地特有の自然環境を示す中で、火山性の降灰物が広く分布する地質条件にも繋がり、農業生産に係る遺跡が、明確ではないという特性が指摘されるのである。つまり、弥生時代からの社会経済に適した遺跡の経営には適合できない条件が多く、弥生時代中期以降の遺跡分布を規制しているのである。古墳時代中期以降、12世紀の富士山信仰に係る遺跡の登場までは、継続性の弱い遺跡の出現が確認されるのみとなる。

採集経済に依存する段階では、富士山の噴火による自然災害が及ぼす壊滅的な状況下では、遺跡の造営が進まない。富士山の地形的な安定が固れない旧石器時代の遺跡は、その終末段階の芝川町小塚遺跡（芝川町教育委員会1972）の出現まで待たなければ、この地域における人間生活の痕跡としてのその開始を窺うことはできないのである。

縄文時代草創期から早期は、新富士火山の活動が過ぎ、火山の静穏期を迎えた段階として、富士山西南麓における活発な活動の痕として遺跡の分布が確認される。その構造となるのは、羽鮒丘陵西側で芝川に面して位置する芝川町大鹿塙遺跡の登場であろう（芝川町教育委員会2003）。新富士火山の熔岩流の末端部分に築かれたこの遺跡は、縄文時代草創期の定住型集落遺跡として11軒の竪穴住居址が発見されている。縄文時代草創期から早期にかけてその遺跡分布の目立つ点が、この富士山西南麓における地域的な特色であり、縄文時代早期の集落が発見されている若宮遺跡は、その代表例として捉えることができる。この段階の遺跡としては、芝川町小塚遺跡、小松原遺跡、黒田向原遺跡、奥山地遺跡、石敷遺跡、丸塚遺跡、富士市天間沢遺跡、富士市ジンゲン沢遺跡などが上げられる。この滝戸遺跡（1）においても、当該期の土器が過去の調査において発見されている（第1図）。

縄文時代早期に比べて、縄文時代前期の遺跡の分布はそれほど増加する状況はない。その中で、富士川の下流域に展開する「木島式土器」の標識遺跡である木島遺跡は特筆されるものである（富士川町教育委員会1981）。前期の遺跡としては、出水遺跡、峯石遺跡や清水ノ上II式土器を伴う竪穴住居址が調査されている箕輪B遺跡、諸磯式土器の段階である代官屋敷遺跡、新堀遺跡などが上げられる。これらがいずれも富士根地区に展開する遺跡であるのに対して、羽鮒丘陵側では、芝川町小塚遺跡とこの滝戸遺跡においてこの時期の資料を見るができる程度になる。縄文時代前期の分布域は、富士山西南麓で広域的な分布を示した早期から富士根地区に対してその中心が認められようになり、その範囲を違えている様子が窺えるのである。滝戸遺跡においては、清水ノ上式土器、木島式土器、関山式土器、諸磯式土器などの出土があり、東海西部系と関東系の型式が継続的に推移し

ている様子が知られている。

縄文時代中期～後期にかけては、遺跡分布の濃淡がはっきりし、新たな集落の構成を示すようになる。それは、大小の遺跡が面的な分布を示すのではなく、一定の区域に集中するような状況として捉えることができる。但し、縄文時代中期前葉の五領ヶ台式土器段階では、竪穴住居址が調査されている上石敷遺跡や代官屋敷遺跡など、明らかな分布圏を形成しないで単独で発見される場合が認められている。勝坂式土器段階以降は、滝戸遺跡、大中里坂下遺跡（9）の周辺と箕輪A遺跡、大室遺跡の分布域に集中して遺構、遺物の発見が見られようになる。特に、滝戸遺跡における集落經營のあり方は他を圧倒しており、勝坂式から縄文時代後期堀之内式土器段階までの多量の土器と共に竪穴住居、配石、集石、埋甕など数多くが調査されている。また、大中里坂下遺跡は、埋没谷を挟んで滝戸遺跡と近接しており、同じ生活圏の中で經營されていた遺跡と言えるものである（富士宮市教育委員会2005）。大中里坂下遺跡に隣接する福伝遺跡（11）でも堀之内式土器の遺物包含層が調査されている（富士宮市教育委員会1993）。

縄文時代中期中葉から後期前葉にかけての遺跡分布は、上記の分布域に富士市天間沢遺跡から滝ノ上遺跡の一帯を含めても、富士山西南麓での遺跡分布は比較的限定されているものと考えられるのである。そして、いずれの分布域に展開する各遺跡は、広範囲の広がりを見せない小規模なもので構成されるという特徴を持つのである。時代が継続するためには多量の土器類が出土することが、あたかも有力な遺跡經營の実態を表すとする誤解を生んでいるのである。近年の発掘調査成果では、滝戸遺跡をはじめとして、箕輪A遺跡、天間沢遺跡などの遺跡範囲がそれほど広がらない状況が解明されつつあるのである。滝戸遺跡については、限られた範囲ながら時代が複合して、遺構、遺物が発見されるその継続性をどのように評価するかが遺跡の性格を考える際に重要となってくるのである。

縄文時代の遺跡は、堀之内2式期以降、急激にその数を減らしている。その中で、堀之内Ⅱ式～加曾利B式土器段階の資料を一定量出土している大中里坂下遺跡は特筆されるのである。縄文時代晩期段階では、その前葉段階に限られ、辰野遺跡、大中里坂下遺跡、大中里坂上遺跡（8）、滝戸遺跡において少量の遺物の出土が認められる程度となる。この段階の後、富士山西南麓において、富士山の噴火による大沢ラビリ（スコリア）が厚く、広範囲において堆積する段階を迎えるのである。

大沢ラビリの降灰以降、新たな遺跡經營が本格化するのは、弥生時代中期前葉渋沢遺跡の登場を待たなくてはならない。この段階の遺跡としては、大中里の縄文時代遺跡より一段高い西側の丘陵上にある別所遺跡が上げられ、この時期の土器類が採集されている。弥生時代中期前葉の遺跡は、他に押出遺跡や下谷戸遺跡など少数ではあるが確認されている。いずれの遺跡も肥沃な沖積地に対する志向は弱く、山梨県内に続く山間地に点在しているものである。弥生時代中期中葉から後葉にかけての遺跡は、富士市内の沖積平野で沖田遺跡が発見されているが、富士地区における類例は極めて少ない。この弥生時代の空白期を経て再び遺跡の登場が知られるのは、弥生時代後期に入つてからである。滝戸遺跡の潤井川を挟んで対岸に広がる泉遺跡（6）や羽衣町遺跡（7）は、弥生時代後期に登場する遺跡であり、沖積地内の微高地を占有している。泉遺跡では、弥生時代後期中葉の環濠が調

査されている（富士宮市教育委員会1993）。富士地区での環濠集落は、この泉遺跡と月の輪上遺跡、富士市宮添遺跡で発見されている。泉遺跡において環濠が埋められた頃、滝戸遺跡などの丘陵部において集落遺跡の造営が明らかとなる。大中里坂下遺跡、月の輪上遺跡、下谷戸遺跡、石敷遺跡などが上げられるが、星山丘陵内における新たな開発が目立った動きとして捉えられるものである。

古墳時代前期では、丸ヶ谷戸遺跡において全長26mほどの前方後方形周溝墓が築かれ、潤井川流域の中心地として、この地域において大きな地域勢力の成立したことが分かる。古墳時代前期前半では、丸ヶ谷戸遺跡の他に丸ヶ谷戸遺跡に接する三ツ室遺跡、星山丘陵の月の輪平遺跡、前述の泉遺跡、滝戸遺跡などが上げられる。前期の後半では、前半から継続する月の輪平遺跡や滝戸遺跡の他に泉遺跡、大中里坂下遺跡、野中向原遺跡（12）、牛ヶ沢遺跡などの遺跡が知られるが、月の輪平遺跡周辺と滝戸遺跡周辺に集中するようになり、富士山側の富士根地区における遺跡の所在ははっきりしなくなる。この段階では、月の輪平遺跡の近くにある塚本古墳の評価が重要となってくる。塚本古墳は全長60mを測る前方後円墳が想定されているが、墳丘等が残存していないため、詳細はよく分かっていない（富士宮市教育委員会2004）。

5世紀後半～6世紀にかけての群集墳が滝戸遺跡のある丘陵部に築かれている。この群集墳は、その造営がこの地域の中でも古い初期の群集墳で、周辺に類例を見ない。群集する最頂部と思われる場所に全長33mを測る前方後円墳である滝戸1号墳があり、特徴的な群構成を示している。この群集墳に係ると思われる同時期の集落遺跡は、浅間大社遺跡（4）、大宮城、貴船町遺跡（3）、泉遺跡などが上げられ、滝戸遺跡に対して潤井川の対岸に広く展開する遺跡群を形成しているのである。そして、滝戸遺跡ではこの段階を最後に遺跡造営の痕跡は見られなくなるのである。

《文献》

芝川町教育委員会1972『駿河小塚』

芝川町教育委員会2003『大鹿庭遺跡 痕B遺跡』

富士川町教育委員会1981『木島』

富士宮市教育委員会1993『富士宮市の遺跡』

富士宮市教育委員会1997『滝戸遺跡』

富士宮市教育委員会2004『塚本古墳』

富士宮市教育委員会2005『大中里坂下遺跡』

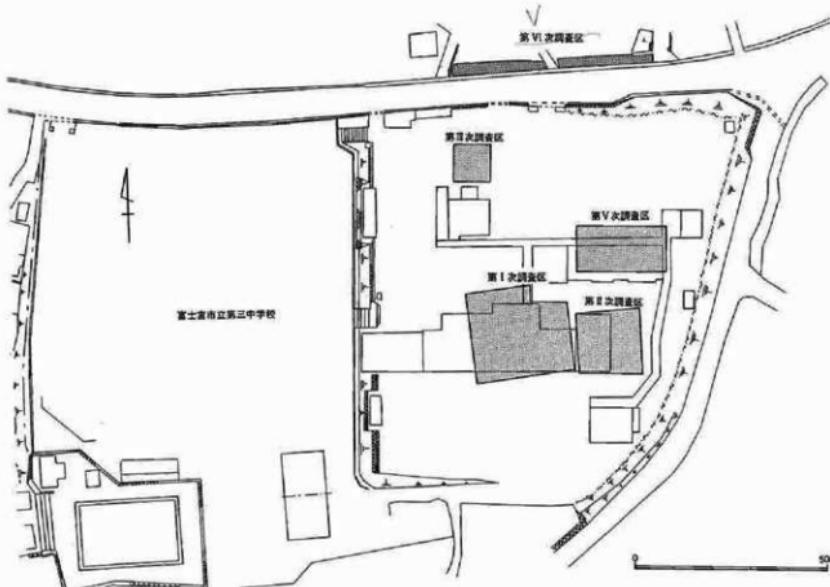
第Ⅱ章 調査の経緯と経過

1. 調査に至る経緯

主要地方道富士宮芝川線は、富士宮市の西部から隣接の芝川町を結ぶ産業の道で、近年では山梨県峡南地方を含めて、岳南工業地帯への重要な西の玄関口として交通の要所となってきた。反面、旧来の道路形態は交通の「難所」として慢性的な渋滞を招き、その解消と併せて歩行者を守るべき歩道の整備は緊急の課題であった。

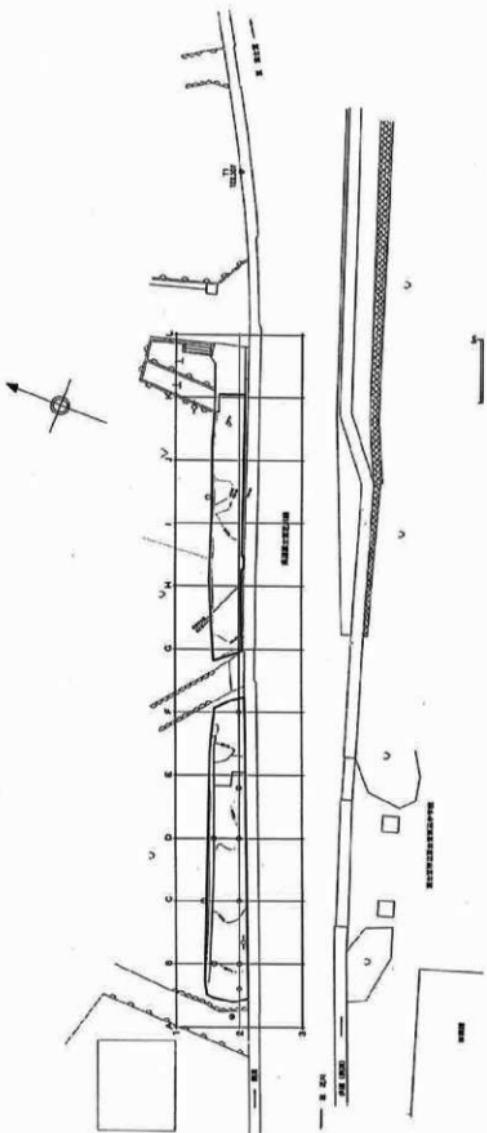
このため、静岡県富士土木事務所では主要地方道富士宮芝川線緊急交通環境改善事業工事を計画して、平成17年度には滝戸橋脇より芝川寄りへ40m余を改良、18年度には市立富士宮第三中学校北東の三叉路から同校正門入口前に至る約130m区間を予定したが、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である滝戸遺跡（県遺跡番号44）の範囲に該当するとして、静岡県教育委員会文化課による確認調査が平成18年4月26日と同6月29日に実施された。

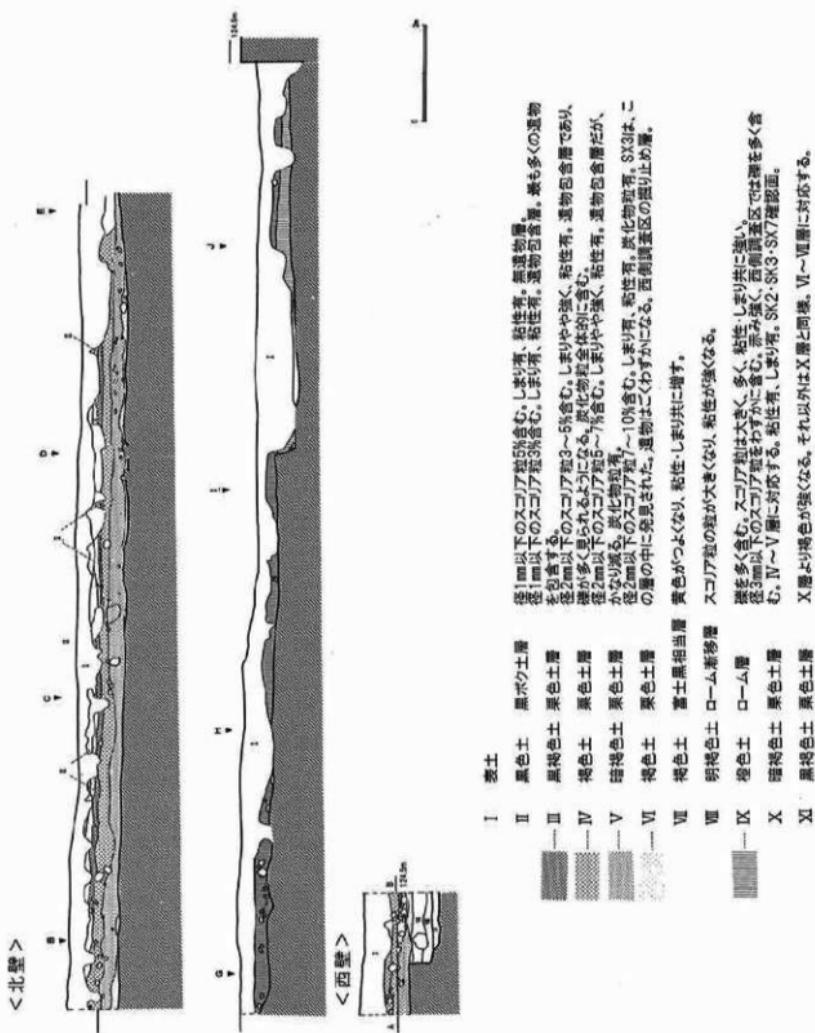
その結果、工事計画地の西側に約80m (160m^2) にわたって包含層の残存が確認されたため、県教育委員会文化課は記録保存のための発掘調査が必要であることを県富士土木事務所に回答し、平成18年6月15日に所轄地の富士宮市教育委員会を交えた3者で当該地の取扱いについて協議を行った。



第3図 調査区の位置

第4図 グリッド配置図





第5図 調査区全体土層図

協議はすでに発注済みの改良工事のなかで発掘調査を実施する事業の有り方の確認が主となり、年度内事業での調査の完了（現地作業と整理作業、及び調査報告書の刊行）と、調査の実施を富士宮市教育委員会文化課が担うことが確認された。

この協議を基に、県教育委員会文化課の指導のもと、県富士土木事務所長鈴木義勝と富士宮市長小室直義との間に、「平成18年度[第18-D4249-01号]主要地方道富士宮芝川線緊急交通環境改善事業工事に伴う滝戸遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託」が平成18年9月20日付けで締結された。

委託期間 平成18年9月21日から平成19年3月24日まで

業務委託料 4,250,000円

2 調査の経過

発掘調査は、平成18年10月2日に、有限会社坪井組による表土処理業務委託を開始し、同月12日より、発掘調査を開始した。調査区は狭く細長いため、堆土は、調査区東端に集めることとした。

発掘調査は、すべて人力による包含層の掘削及び遺構の検出・実測を行った。実測は、任意に設定した調査坑より作成した、1mの方眼を用いて行った。調査に関わるすべての標高値は、株式会社フジヤマによる基準点測量業務委託成果を用いて記録した。基準点測量の精度は、3級基準点測量である。

発掘調査は、同年11月17日に終了した。調査区の測量および位置図は、同年11月20日に株式会社フジヤマが実施した測量成果を用いて作成した。残務整理の終わった同月29・30日に発掘事務所等の撤去作業を行い、現場での作業をすべて終えた。

整理作業は、発掘調査の終了に先立ち、同年11月13日より洗浄などの作業を開始した。以降、翌年19年3月23日まで、注記・遺物分類・実測・トレース・図版貼りこみなどの報告書の作成作業および写真撮影などを行い、報告書刊行にかかるすべての作業を終了した。

3 調査区の名称

調査区は、長さ東西に約50m、最大で、南北に約3.4mの細長い形状である。そのため、任意に5m方眼を調査区に対して設定し、アルファベットと数字を用いてラインの名称に割り当てた（第4図）。グリッドは、グリッドの左上交点をもってグリッド名とした。

また、これまで、滝戸遺跡の調査は、本調査を含めて6次にわたって行なわれている（第3図）。本調査区は、第VI次調査区とする。

4 層序

調査区の北壁をもって示す。本調査区は、市立富士宮第三中学校がある丘陵の平坦地と、その北側に流れる潤井川との境付近にあたる。そのためか、調査区の西側（A～Eグリッド）と、調査区の東側（F～Kグリッド）では、土層の様相が異なる状況にある（第5図）。

調査区は、AグリッドからFグリッドに向かい西から東へ、緩やかに傾斜している。より丘陵側の西側では、弥生時代以降の遺構確認面である大沢ラビリ層の残存状況はあまり

明瞭ではなかったが、黒ボク土層から栗色土層（縄文時代前期～晚期）、富士黒相当層（縄文時代草創期～早期）、ローム層といったこの地域に標準的な土層が確認された。一方、東側では、表土下に、栗色土層の中層から下層（IV～V層）に相当すると考えられる層が確認され、本来の土は流失していると考えられる。また、東側は、搅乱も多く、後世の削平を受けた可能性も高いが、西側と東側の同じ栗色土層下層を比較してみると、東側の栗色土層下層は、より赤みが強かった。また、東側には、富士山麓で、ローム層の下層に確認される古富士泥流層起源と考えられる溶岩が、栗色土層下層の中にすでに多く含まれている状況であった。そのため、調査区の東側は、土層が乱れていると考えられ、丘陵の縁辺から潤井川にむけての傾斜変換点にあたると考えられる。

丘陵部において、弥生時代の遺構は、大沢ラビリ層をその確認面として検出される場合が多く、発掘調査もその層を鍵層として調査を進めている（第6図）。大沢ラビリ層は、本来、第II層（黒ボク土層）の上に堆積しているものであるが、今回の調査地点では、後世の削平などにより一部分でしか残存していなかった。大沢ラビリ層を掘削する弥生時代の遺構の場合、掘り込みの浅い遺構では、後世の削平が遺構全体まで及んでおり、すでに消失しているものも多いと思われる。そのため、今回の調査における遺構数が本来の遺構の総数を反映している度合は、低いものと考えるべきである。

今回の調査では、第II層や第III層などに対して確実に掘り込みが行なわれている掘り方や柱穴などが、その残存として竪穴住居を認定する場合が多い。さらに、東側調査区において遺構がほとんど確認できないのも、この調査環境が大きく左右しているものであり、東側調査区における遺構の空白地が本来の遺構分布の姿相を表しているわけではない。

栗色土層の上層（III層）では、最も多くの縄文時代の遺物を包含していた。栗色土層下層になるにつれ、遺物の出土量はかなり減少した。栗色土層の上層がすでに消失している東側では、遺物の量はかなり少なかった。そのため、本調査で主体的な時期を占める縄文時代中期から後期の時期に相当する層は、III層からIV層であると考えられる。

縄文時代の遺構は、確認された範囲では、以下の層で発見された。

S X 2 … V層
S X 3 … VI層中
S X 6 … X層
S K 3 … X層

平面的に見た場合、栗色土層の変化を覚えるのは困難である。ではあるが、土層観察用の壁から離れていたS X 1、S X 4の確認面は、調査中の早い時期に発見された遺構であるので、栗色土層の上層部分に構築されていた可能性が高いと考えられる。また、S K 2は、S X 6の上層で確認されている。X層は、栗色土層の下層に対応すると考えられるため、S K 2は、より栗色土層の上層に構築されていると考えられる。

第Ⅲ章 弥生時代

淹戸遺跡では、これまでの発掘調査で弥生時代後期～古墳時代前期の集落が発見されている。集落は、墓域と居住域として確認されているものであるが、年代的にその区域を変えながら構成するものであり、同一地点において継続しながら集落經營が行なわれるものではない。

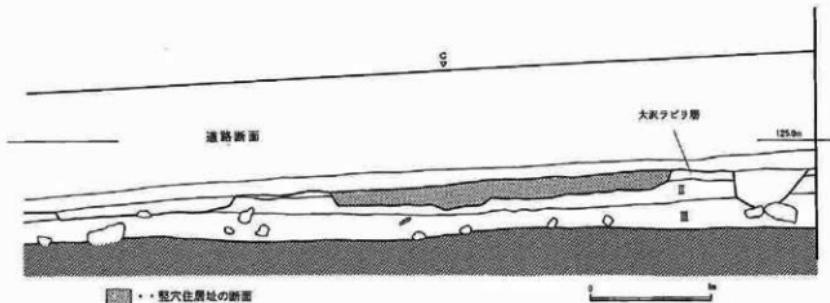
今回の発掘調査では、弥生時代後期の居住域が確認されている。これは、淹戸遺跡第V次発掘調査として実施された富士宮市立第三中学校内の発掘調査地点で発見された同時期の集落の一部として捉えることができるものであり、そこから50mほど離れた今回の発掘調査地点までその範囲の広がりが確実に認められることが判明したものと言える。

弥生時代後期の墓域としての方形周溝墓が群構成を示して発見されている潤井川の右岸における淹戸遺跡第IV発掘調査の地点は、今回の発掘調査地点から北西側へ80mほどの場所に当たる。同じ丘陵面に位置すると思われるが、今回の地点まで墓域の広がりは確認していない。淹戸遺跡内における弥生時代後期集落の構成を考える上で、居住域と墓域の関係として今回の調査において一定の見通しが着いたものとして捉えることができるものである。

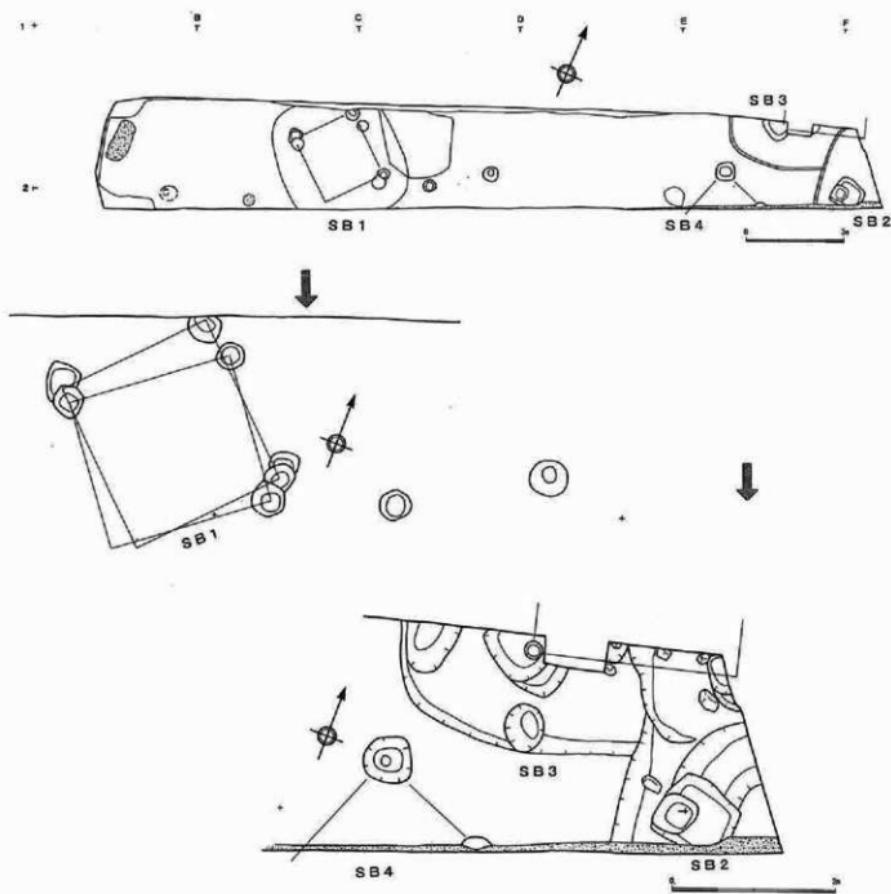
1 遺構

発見されている遺構は、竪穴住居址4棟とピット4個である。ピットについてはその具体的な用途については調査範囲の関係などから判断できない部分が多いが、中には竪穴住居址や掘立柱建物跡などの柱穴を構成する一部になるものも含まれる可能性がある。

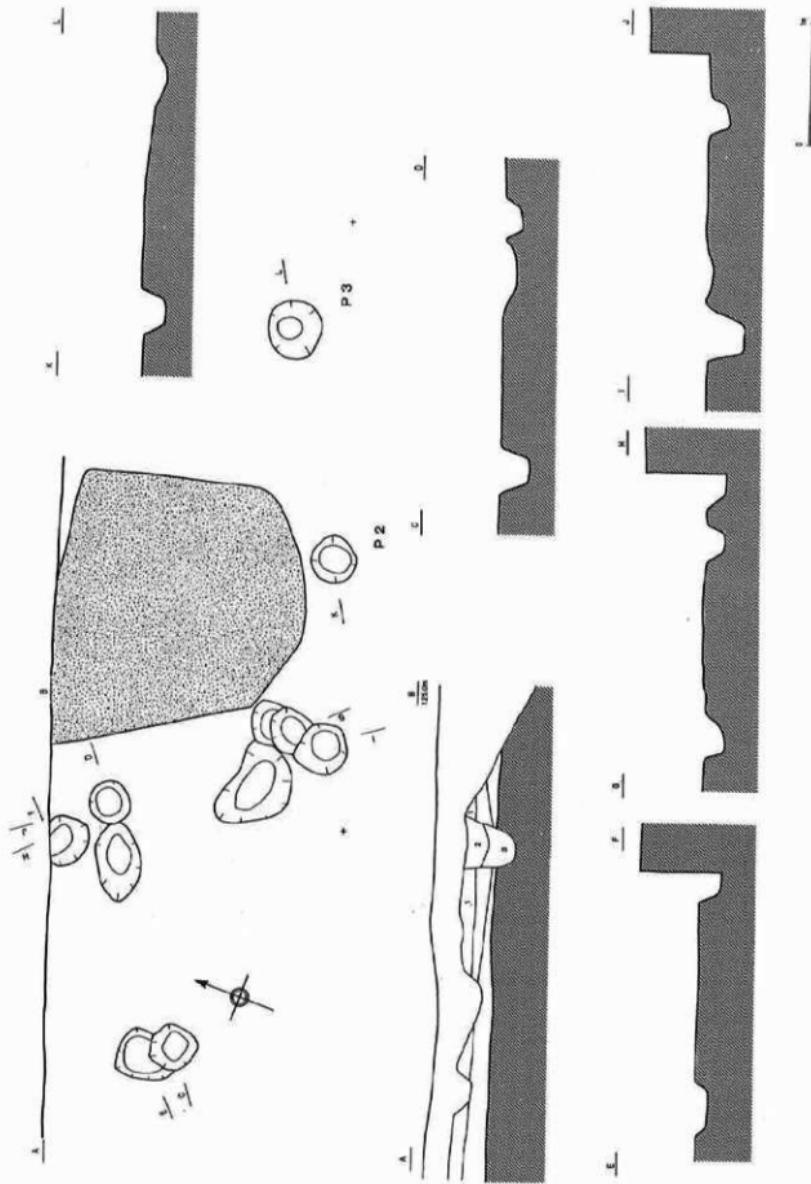
竪穴住居址は、後世の削平が進行しており、その大半において竪穴の床面以下、掘り方あるいは柱穴だけの状態で確認されている。また、狭い調査区の関係上、すべて調査区域外への展開を示しており、その全体の規模や形態が分かるものはない。更に、発見された残存状況が悪く、竪穴住居に伴う良好な遺物の出土も確認されていない。



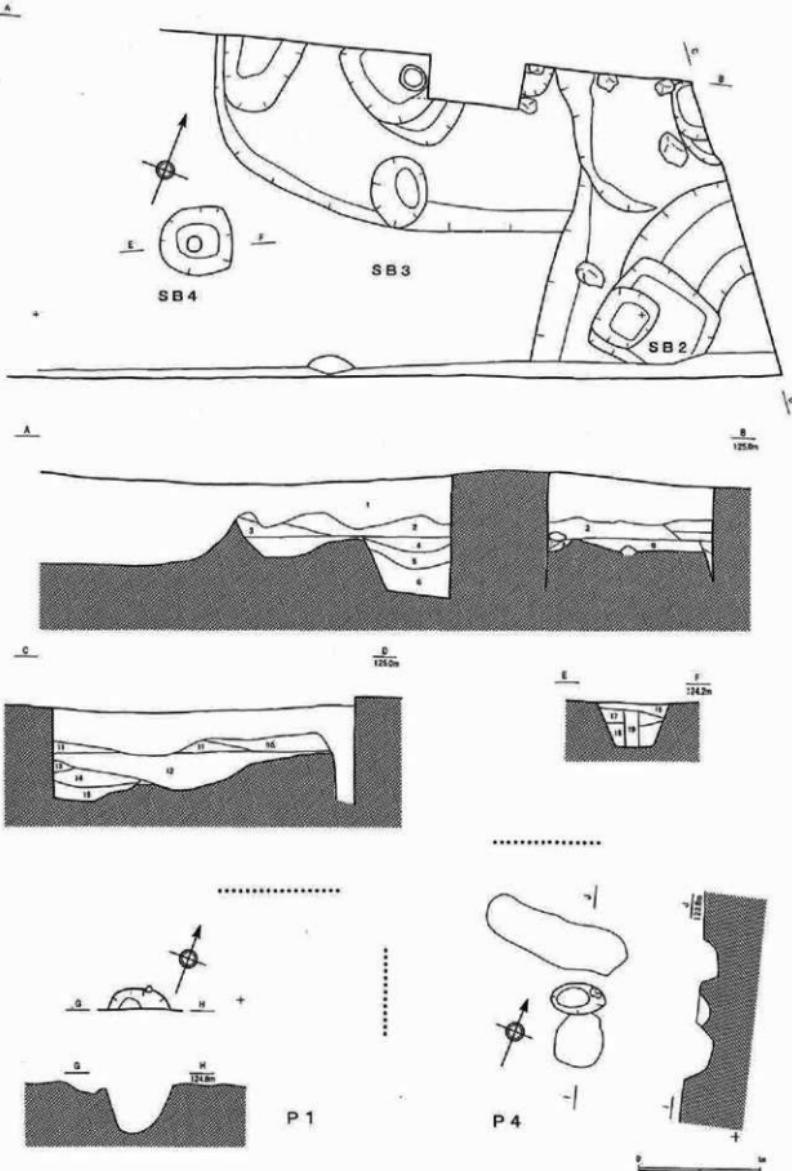
第6図 弥生時代遺構検出状況図



第7図 弥生時代遺構全体図



第8回 SB1・P1・P2案測図



第9図 SB2・SB3・SB4・P1・P4実測図

(1) SB 1 (第8図)

B-1からC-1グリッドに亘って発見されている柱穴と思われるピット群を堅穴住居の残存部分としてSB 01とする。調査区の壁面では、南北の両面とも堅穴住居の掘り方としての落ち込みが確認されている。北壁では1.5m程の幅の範囲で0.15m程度の厚さを測る掘り方の跡が確認されている。掘り方の底面は、平坦で溝などの掘り込みは認められない。この状況は、南壁面でも同様で、床面まで削平が及ぶため、掘り方の跡だけが堅穴の掘り込みとして発見されている。壁面において確認される掘り方は、長さ2.8m、最深部で0.19mを測る。中央部がやや窪むが、全域を掘り込む形状を示している。このような状況からSB 1は、調査区両側の区域外まで展開することが分かる。更に、調査で発見されている柱穴の状況から調査区の北寄りに堅穴の中心を持つ遺構であることも判明している。

SB 1に係る柱穴と思われるピットは、堅穴住居が重複するか、その建替えが実施されたようで、柱穴の付け替えが認められる。柱穴は、南西側の1個が確認されなかったもの4本柱の中で、3本については調査区内で発見されている。柱穴列は南側から北側への作り替えとして新旧関係を持つ。新段階の柱列は、0.35~0.4m程度の大きさで、隅丸方形を示すピットにより構成されている。深さは、確認された土層面から最深部で0.3mを測る。柱間はピットの中心で北側2.1m、東側で1.85mをそれぞれ測り、東西方向に長軸を持つ堅穴住居が想定される柱穴の配置を示している。

古段階の柱列のピットは、0.4~0.5mを測るもののが認められ、新段階のものより一回り大きなもので構成されている。形状は方形を基調としているようであるが、明瞭さに欠ける。深さについては0.15m程度であるが、調査区北壁で確認されている断面では大沢ラビリ層を基盤として深さ0.4mを測る。相対的に新段階の柱穴の方が深く掘り込められている様子が分かる。柱穴列の規模は、北側列で1.9m、東側列で2.1mを測り新段階の堅穴住居とは異なる南北方向に長軸を持つ状況が指摘されるものである。なお、ピットの周辺においては、堅穴住居に伴うものと思われる掘り方の一部が浅い土坑状の落ち込みとして確認されている。

SB 1に直接関連する遺物の出土は見られない。

(2) SB 2 (第9図)

E-1・2、F-1・2のグリッドに広がるように、西側調査区の東端で発見されている。後述するSB 3と北側で重複しており、それより新しくなる。発見されているのは、床面の一部と掘り方、堅穴住居の北東側に位置していると思われる柱穴1個である。調査区の壁面においては、堅穴の掘り込みが一部確認されており、深さ0.15mを測る。壁際の周溝の痕跡は認められない。柱穴は掘り方が $0.93m \times 0.83m$ を測る方形の形状のもので、深さ0.3mを測る。掘り方内の東隅に $0.48m \times 0.45m$ を測る方形のピットが更に0.15mほど掘り進められている。柱に直接係るものと思われるが柱痕などの痕跡は確認していない。

堅穴住居の掘り方は、堅穴の周囲を掘り廻める形状のもので、相互の柱穴を結ぶように緩やかに弧を描く溝状の掘り込みとして発見されている。掘り方は、堅穴住居の床面から溝底面の最深部まで0.3mを測る。

SB 2に直接関連する遺物の出土は見られない。

(3) SB 3 (第9図)

SB 2 と重複関係にある SB 0 3 は、E-1 グリッドにおいて発見されている。SB 3 の方が古く、床面が 7 cm ほど高さの差を有する。SB 2 より低い場所で床面の構築が認められるものであるが、竪穴住居の東側部分は、SB 2 建築時の掘り方により消失している。SB 2 と同様に調査区壁面において竪穴が確認されている。0.2 m ほどの掘り込みが認められ、ほぼ平坦な床面を形成している。確認されている竪穴の壁は、直線的に立ち上がるものであるが、後世の削平の影響を大きく受けしており発見されている部分は少ない。竪穴住居に伴う覆土は、2 層に分層され、壁際において黒褐色土の三角堆積が見られる。

附属する施設としては、柱穴 2 個、炉址 1ヶ所が発見されている。炉址は調査区の壁際において発見されているもので、大半は調査区域外に延びており、形態などについては分からぬが、調査されている部分において、深さ 0.1 m を測る皿状の落ち込みとして確認されている。炉址内部には焼土が充填しており使用頻度の高さが窺える状況を示している。炉址の位置は、竪穴住居の中央より南側に偏る南東側中央部にあり、竪穴住居の入口部がその北側にあるもので、竪穴住居が丘陵斜面の低いほうに入り口部を持って構築されている事が分かる。なお、炉址から壘の小破片が 1 点出土している（第10図-4）。

柱穴は、この炉址を挟むように東西両側で発見されている。東側の柱穴は、重複関係にある SB 2 の掘り方の下で発見されたもので、長軸 0.75 m を測る方形を基調とした掘り込みが認められる。床面からの深さは、0.3 m を測る。西側は長軸 1.1 m を測る東側と同様に方形の掘り方として確認されている柱穴で、その西側が長軸 0.84 m、深さ 0.1 m を測って、さらに方形に窪む。この柱穴の場合は、そのほぼ中央に径 0.15 m を測る柱の当たりである硬化面をその底面に持つ径 0.2 m を測る円形の小ビットが確認されている。ただし、それに伴う柱痕自体の発見はない。2 個の柱穴は、その検出の状況から 2.5 m ほどを測る柱間の長さが想定されるものであり、SB 3 とした竪穴住居自体も比較的規模の大きな住居跡であるものと判断される。

竪穴住居の掘り方は、西側の壁際で南北に走る溝状の掘り方が見られ、東側の柱穴周辺において掘り窪めている状況を認めることが出来る。反面、炉址部分において掘り方の形成が顕著に見られないことから竪穴住居の周囲を溝状に掘り窪める掘り方が構築したものと思われるが、調査されている南壁際では明確な掘り込みを確認されていない。全周しない形態のものなのである。掘り方は、最深部分で 0.15 m の深さを測る。

SB 3 に直接関連する遺物の出土は見られない。

(4) SB 4 (第9図)

E-1、E-2 グリッドにおいて柱穴と思われる 2 個のビットが発見されている。それらが竪穴住居に伴うものか掘立柱建物を構成するのか、判断できないが、いずれにしても調査区域で確認されたのは、2 個の柱穴であり、他のものは調査区域外に展開するものである。柱穴は、東列の北側の 2 個が調査されている。南側の柱穴は、大半が調査区域外に延びており詳細は分からぬ。発見されている部分では、深さ 0.1 m を測る。E-1 グリッドで発見されている遺構の北東隅に当たると思われる柱穴は、長軸 0.6 m × 短軸 0.57 m を測る正方形を指向した平面形で、深さ 0.38 m を測る掘り方を示している。掘り方の中央

付近には径0.12mを測る円形の硬化面が発見されている。これは柱自体の当たりであるが、相関して柱痕を土層断面上で検出している。柱痕は掘り方底面の当たりと同様に幅0.12mを測り底面から0.3mの高さまで確認している。それ以上は豊穴住居廃棄後の覆土で覆われている。柱の下部のみが残存していたような状況を示していると言える。柱痕の周囲は版築状に埋められた埋土により構築されていた。この埋土は、上下2層に分層され、共に栗色土のブロックを含む黒褐色土で、粘性の強い層相を示す。また、柱痕の部分は、粒子の比較的粗い、しまりの弱い黒褐色土として確認されている。

2個の柱穴が同一の規模を持つものと想定すると、柱間は、1.8mほどの長さを測るものとなる。

S B 4に直接関連する遺物の出土は見られない。

(5) ピット (第8図・第9図)

弥生時代以降の遺構としてピットが4個発見されている。A-2グリッドで1個、C-1グリッドで2個、調査区東側のH-1グリッドで1個確認している。ここでは、それらを順にP 1からP 4とする。半分以上が調査区域外にあるP 1は0.5mの幅を持ち、深さ0.4mを測る。C-1グリッド内の西側のP 2は径0.4mを測る円形で、深さ0.28mを測り、東側のP 3は長径0.48mを測る梢円形の平面形で、深さ0.1mを測る浅いピットである。

東側の調査区は、後世の削平が栗色土層まで及んでおり、弥生時代以降の遺構等の残存がほとんど期待できない地区であったが、東側調査区の中央付近において、浅いピットであるP 4が1個発見されている。このP 4は長径0.44m、短径0.25mを測る梢円形のピットで、深さ0.1mを測る。

これら4個のピットは、すべてレンズ状に堆積している覆土により埋まっていると判断されるものであり、平面が円形を基調している点で類似性が指摘できるものもある。

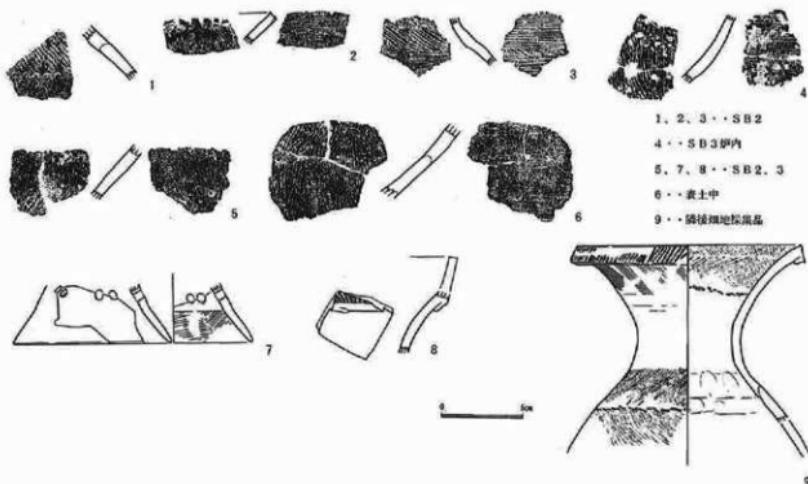
いずれのピットからも直接関連するような遺物の出土は見てない。

2 遺 物 (第10図)

1は、文様としてRLの縄文と端末結節文が施されている壺肩部破片である。ちょうど、成形時の粘土帯の接合部分に当たり、内面において接合痕をヨコナデしている様子が見られる。2は口唇部に刺突文の見られる壺の口縁部破片である。内面にヨコハケメ、外面にナナメハケメが施されている。やや水平気味に広がるものであり、頸部が鍵の手に屈折する壺の口縁のような形態を示している。3は壺の頸部～胴部にかけての小破片である。外面は頸部のナナメハケメの後、肩部のヨコハケメを施すハケメの整形順序を認めることができる。内面は2種のハケメによる整形で、胴部の太い条線のハケメの後、口縁部を細いヨコハケメで仕上げている。外面のおける煤の付着が顯著に見られる。

4は、S B 3の炉址内で発見された壺の胴部破片である。加熱によるものか、内外面における表面の剥離の目立つ破片資料である。内面はヨコハケメ、外面はナナメ～タテハケメを見ることがある。直接、炉で使用されていた壺の一部かどうかはよく分からない。

5は壺胴下半部の破片資料である。内面の細かいヨコハケメが目立ち、残りが良い。内面においては煤の付着が見られる。外面はちょうど、胴部の接合部分に当たるもので下位



第10図 弥生土器実測図

のタテハケメを上位に見られるヨコハケメによって磨り消されている。

6は表土中において発見された壺の胸部破片である。器厚がやや厚めである点を特徴とする。外面は下位のタテハケメの後に上位のナナメハケメが施されている様子を認めることができる。内面はヨコ方向の細かい条線が見られる。ヨコ方向の板ナデであろう。

7、8は、実測図で示している高壺の脚部破片と壺口縁部の破片である。7は、推定の底径9.8cmを測り、内壁気味の脚部下半が緩やかに外反するものである。脚部の中項になろうか、2個1組の円孔が6ヶ所ほどに施されている。また、内面もその下位にはヨコハケメが残されているものである。

8は、複合口縁壺の口縁部の一部である。複合部の下端を下方に小さく垂下させている点で、折り返し口縁の口縁に粘土帶を付加していると推測させるものである。この資料の大きな特徴は、複合部外面にRLの縄文が施されている点である。

9は、直接今回の発掘調査で発見されたものではないが、隣接する畑地において採集された壺で、地権者の方に提供を受けたものである。張りの弱い肩部に端末結節文を含む縄文が施文され、口縁部内面にも縄文の施文が認められ、内側を結節文で区画する。折り返し部も全体に縄文が施されるもので、加飾性の強い折り返し口縁壺である。頭部外面をハケメ調整の後ヨコナデで整形して点は、端末結節文と同様に菊川式土器の影響の窺われる土器型式である。

〈土層〉

— 造構に係る土層 —

(第8図)

1. 黒色土 (堅穴住居掘り方) 橙色スコリア混入土がブロック状に入る。
2. 黒色土 粒子が粗い層で、橙色スコリア、白色スコリアの混入が目立つ。
3. 黒褐色土 粒子が細かく、栗色土のブロックが目立つ。

(第9図)

1. 灰黄褐色土 (表土)
2. 黑褐色土 粒子が細かく、白色スコリアが目立つ。
3. 黑褐色土 2に比べてスコリアの混入が増え、粒子が粗くなる。
4. 黑褐色土 粒子がやや粗く、栗色土のブロックが見られる。
5. 黑褐色土 粒子が細かく、栗色土のブロックが見られる。
6. 黑褐色土 粒子が細かく、栗色土のブロックが少量見られる。
7. 淡赤橙色土 (焼土) 炭化物、焼土で構成される。
8. 淡赤橙色土 炭化物、焼土に栗色土がブロック状に含まれる。
9. 黑褐色土 (堅穴住居掘り方) しまりの強い層で、栗色土のブロックが目立つ。
10. 黑褐色土 粒子の粗い層で、スコリアの混入が多い。
11. 黑褐色土 10に比べてスコリアの混入が減り、栗色土の混入が目立つ。
12. 黑褐色土 (堅穴住居掘り方) しまりの強い層で、栗色土のブロックの混入が目立つ。
13. 黑褐色土 しまり、粘性の強い層で、スコリアの混入が目立つ。
14. 黑褐色土 しまりの強い層で、栗色土のブロックの混入が目立つ。
15. 黑褐色土 粒子の細かい層で、スコリア混入土のブロックがやや目立つ。
16. 黑褐色土 粒子が粗く、しまりの弱い層。
17. 黑褐色土 栗色土のブロックを多く含み、粘性が強い。
18. 黑褐色土 スコリアを多く含む黑色土の目立つ層で、粘性が強い
19. 黑褐色土 (柱痕) スコリアの混入の少ない粒子の粗い層、

第IV章 繩文時代

1 遺構

繩文時代の遺構は、全部で9基確認された（SX 1～6、SK 1～3）。標高は、124.4mから123.3mの比高差1.1mの範囲に分布する（第11図）。前述のように、富士山麓の繩文時代前期から中期にかけての文化層は、いわゆる栗色土層と呼ばれる、褐色から暗褐色をした土層が相当する。遺構は、これらの中に構築されており、遺構覆土も似通った土色や土質であるため、遺構の範囲の認定には困難を極める。また、本遺跡の土層には富士山の溶岩礫が混入して、集石などの石を使った遺構の範囲もまた、わかりづらくなっている。そのため、集石は、平面的にある程度のまとまりを持った範囲を集石遺構として記載している。本調査では、集石などの土坑状施設の確認されなかつたものについては「SX」の省略記号を用い、土坑が確認されたものについては「SK」の省略記号を用いている。

(1) SX 1 (第12図・図版7・8)

A-1グリッドの標高124.4m付近に発見された。長軸1.06m、短軸0.76mの橢円形の範囲で、直径2～3cmの小石を中心とする溶岩礫の集中範囲である。礫集中の上には、長軸が36cmほどの扁平な溶岩礫と、直径24cmほどの扁平な砂岩質の礫がのっていた。砂岩質の礫は、もとが河原石のように平滑で扁平な円形をしていたと考えられるが、平行に割られてさらに薄くなっている。礫集中範囲の深さは0.16mである。SX 1出土遺物は、ほとんどが土器片で、礫の上に多くが分布している。うち、1点を図示した（第22図48）。曾利式土器の前半かと思われる。その他の土器も曾利式土器が多く、遺構の時期は中期後半と考えられる。

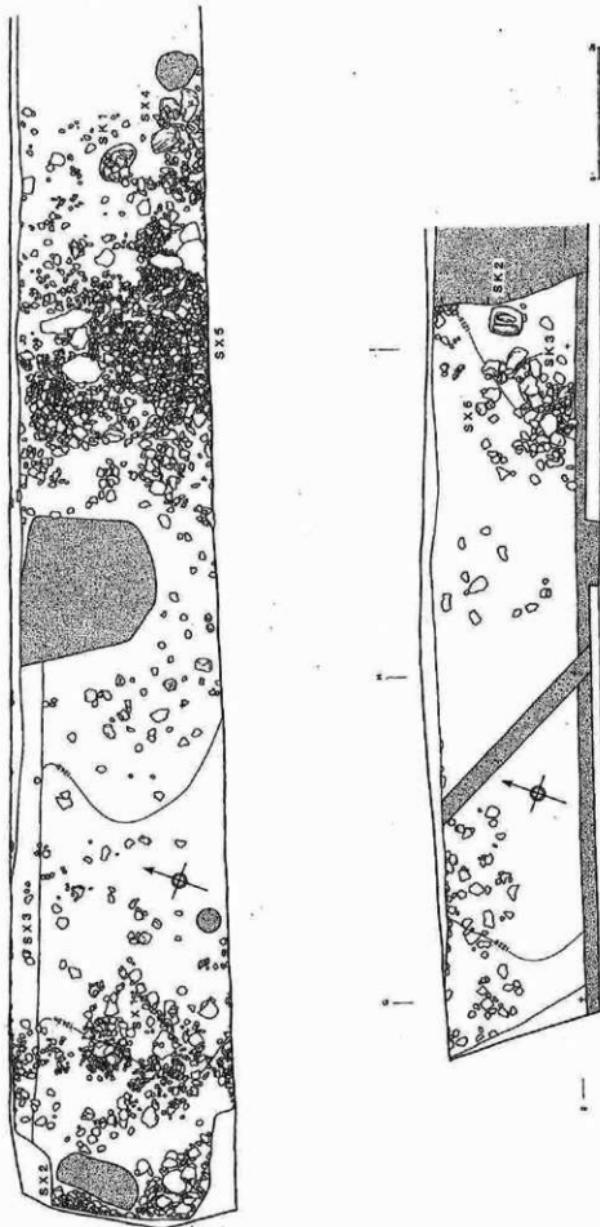
(2) SX 2 (第13図)

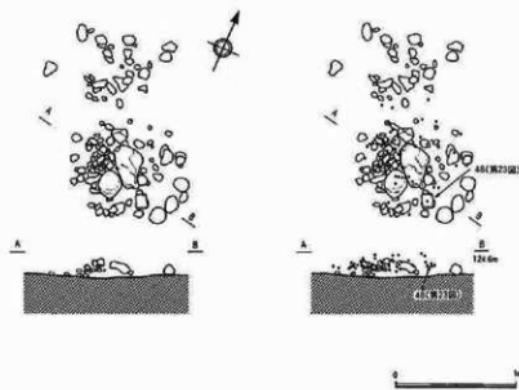
調査区西端の、A-1グリッドで、標高124.3m付近に発見された。遺構の東側は、電柱埋設坑によって消失しており、遺構の西側は調査区外に及ぶと思われる。遺構の一部のみ検出された。壁際で長軸1.22m、短軸0.28m、深さは0.24mの範囲に比較的大きさのそろった拳大の礫が隙間なく集中していた。遺物は出土しなかった。礫はすべて溶岩礫であった。西側の壁を観察したところ、栗色土層（IV層）に覆われているようであり、礫の集中範囲の周囲はやや色調が黒く、しまりのない土が見られたため、その部分をIV層から分離した（1層）。平面的には遺構のプランは確認されなかつたが、掘り込みが存在した可能性が考えられた。

(3) SX 3 (第14図・図版9)

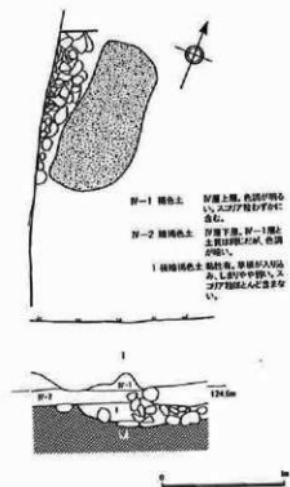
B-1グリッドで、標高123.8m付近で発見された。調査区の北壁に沿って、土層図作成のためサブトレンチを設定したところ、VI層中に発見された。敲石（第27図99）と打製石斧（第28図107）、溶岩礫が長軸0.25m、短軸0.15mの範囲に固まっていた。周囲には、掘り込みなどは確認できなかつた。SX 3から約20cm北側の土層断面沿いには、尖頭器（第27図93）が出土しており、何らかの関連が窺える。VI層は、遺物の包含が希薄となる層である。尖頭器を組成に持つことからも、やや古い段階の遺構である可能性がある。

第11図 繩文時代遺構分布図

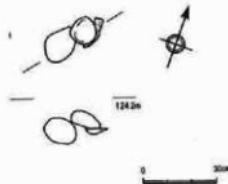




第12図 SX 1 実測図



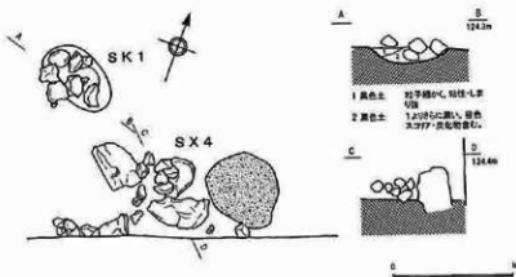
第13図 SX 2 実測図



第14図 SX 3 実測図

(4) SX 4 (第15図)

D-1 グリッドから D-2 グリッドにかけて発見された集石で、標高124.2m付近に位置している。SX 4は、南側の一部は調査区域外に広がっており、全体の形態は分からぬが、長軸1.20m、短軸1.10mの規模を測る。集石の構造は、径0.3m～0.5m程の大型砾



第15図 SX4・SK1実測図

4個を周囲に配置し、その中央部に拳大の礫を集中させている。大型礫は、元々、地山の溶岩礫のようであり、その露呈部分を利用して構築されているようである。さらに、ここで発見されている礫群が厚さ0.2mを有していることから、南西端の大型礫の上面辺りから掘り込んで築かれているものと考えられるものである。

SX4は、西側に隣接してSX5があるが、層位的な関係から明らかな年代差が認められない。その関連を考えると、構造的に大型礫との組み合わせがよく似た状況を示していると言え、同一の遺構となる可能性がある。しかし、ここではSX5との間に見られる礫の空白域を評価して、SX4を分けて単独の遺構としている。

SK4の遺物は、土器片が2点で、その中央付近で発見されている。いずれも無文の土器で土器型式は分からず。

(5) SX5 (第16図・図版11・12)

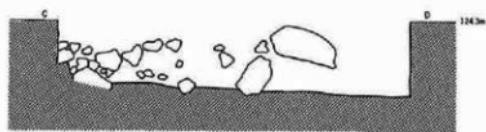
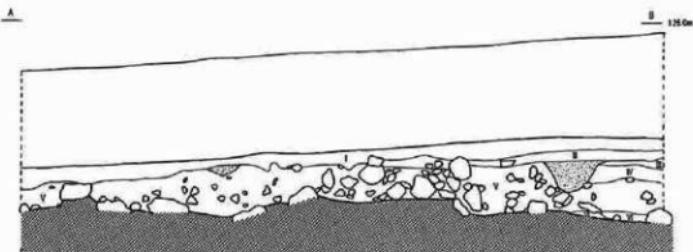
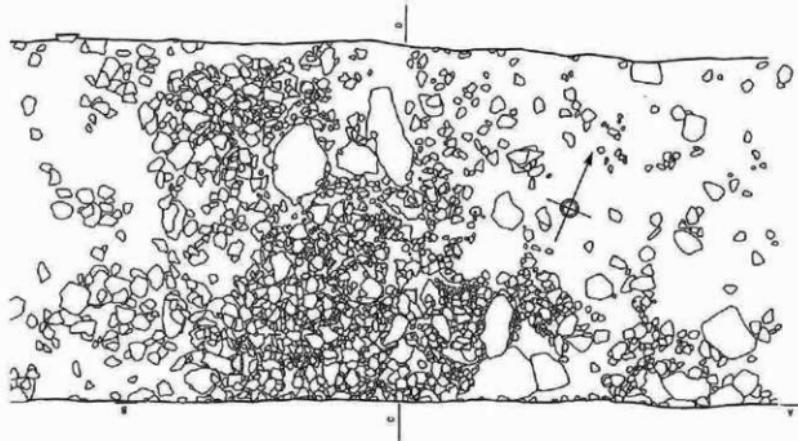
SX5は西側調査区中程のE-1・2及びD-1・2グリッド一面にかけて検出された。規模は検出長さ5m、検出幅3m程度であり、南壁から北壁へ列状に連なっていた。標高は123.8mを測る。

SX5は径10~50cm程度の溶岩礫から構成され、この礫は古富士泥流溶岩起源のものと考えられる。出土遺物は縄文土器と石製品等が認められる。土器は破片資料のみで71点を数えた。内訳は無文26、縄文11、勝坂式4、称名寺式3、曾利式22、堀之内5、また、土器片円盤3、打製石斧1、礫3、貝岩1、黒曜石剥片6点等が出土している。出土土器より、勝坂式から堀之内式までの年代巾が得られたが、年代を絞ることは困難である。

遺物の出土状況や土層堆積状況等を踏まえると、SX5は自然地形によってつくられた礫によって構成されており、その構成された礫上に人為的に築かれた集石が存在する可能性も考えられるが、調査では確認することができなかった。

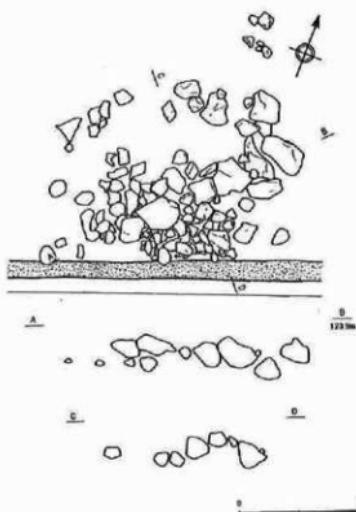
(6) SX6 (第17図・図版13)

H-1グリッドからH-2グリッドで、標高は123.4m付近に発見された。長軸2.17m、短軸1.51mの範囲に、拳大から人頭大の溶岩礫が集中していた。南側は、道路境にコンクリート壁があり、搅乱で消失しているが、礫集中範囲は調査区外にも広がると考えられる。SX6周辺には、SK2・SK3があるが、SX6は、SK2の下層であり、SK3の上

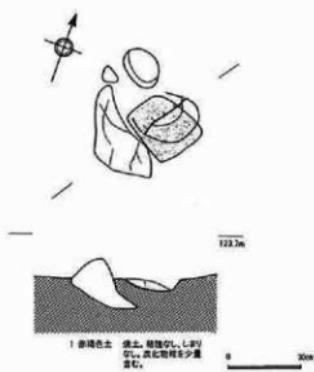


— 25 —

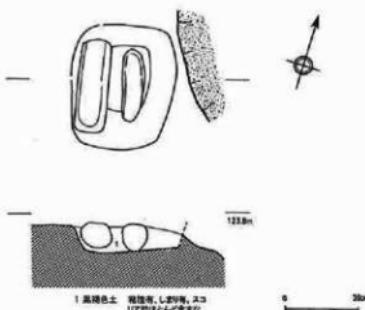
第16図 S X 5 実測図



第17図 SK 6 実測図



第19図 SK 3 実測図



第18図 SK 2 実測図

層に位置する。SX 6 の礫を取り外したところ、SK 3 が発見された。SX 6 の礫の上面は、やや平らな傾向にあるが、底面は平らでない。石を取り外し掘り込みなどの調査を行なったが、掘り込みは確認されなかった。遺物はなく、時期は不明である。

(7) SK 1 (第15図・図版10)

D-1グリッドで発見されている集石で、深さ0.15mを測る楕円形の掘り込みの土坑を持つものである。土坑は長軸0.58m、短軸0.39mの規模を測り、底面は緩やかな舟底状を示す。その底面で標高123.95mを測る。集石に係って土坑内には細かい炭化物を含む埋土が認められる。

集石は8個の溶岩礫が配されており、上下2段で構築されている。礫は径0.15cm程度のものを選択的に使用し、整然と置かれ、その上段の礫を揃えることで上面に平坦面を形成させている。

S K 1 と隣接する SX 4、SX 5 とは、発

見されている層位から時間差が認められる。SX 4 と SX 5 が、それぞれの上面からの構築されたものであるとすると、それらと0.1m程度の中間層を持って SK 1 が発見されていることから、より古い段階のものであると言える。

(8) SK 2 (第18図・図版2)

I-1グリッドで、標高123.6m付近に発見された。表土直下であった。石棒（第29図114）、

棒状の礫（第29図115）の埋納坑である。検出時、周囲には集石あるいは配石といった遺構は見られなかった。石棒以外には、土器などの遺物は出土しなかった。埋納坑の規模は、長軸1.04m、短軸0.84m、深さは0.2mである。埋納坑の平面形は隅の丸い長方形である。石棒と棒状の礫は、平行に並んで埋納されている。石棒は一端を欠損しているが、棒状の礫は完形である。

本遺跡のこれまでの調査でも、石棒は3点出土している。うち1点が、配石遺構からの出土である。その他、富士宮市滝ノ上遺跡においても、配石遺構に組み込まれた状態で4点出土しているが、本調査におけるように土坑を伴って埋納される例は初めてである。

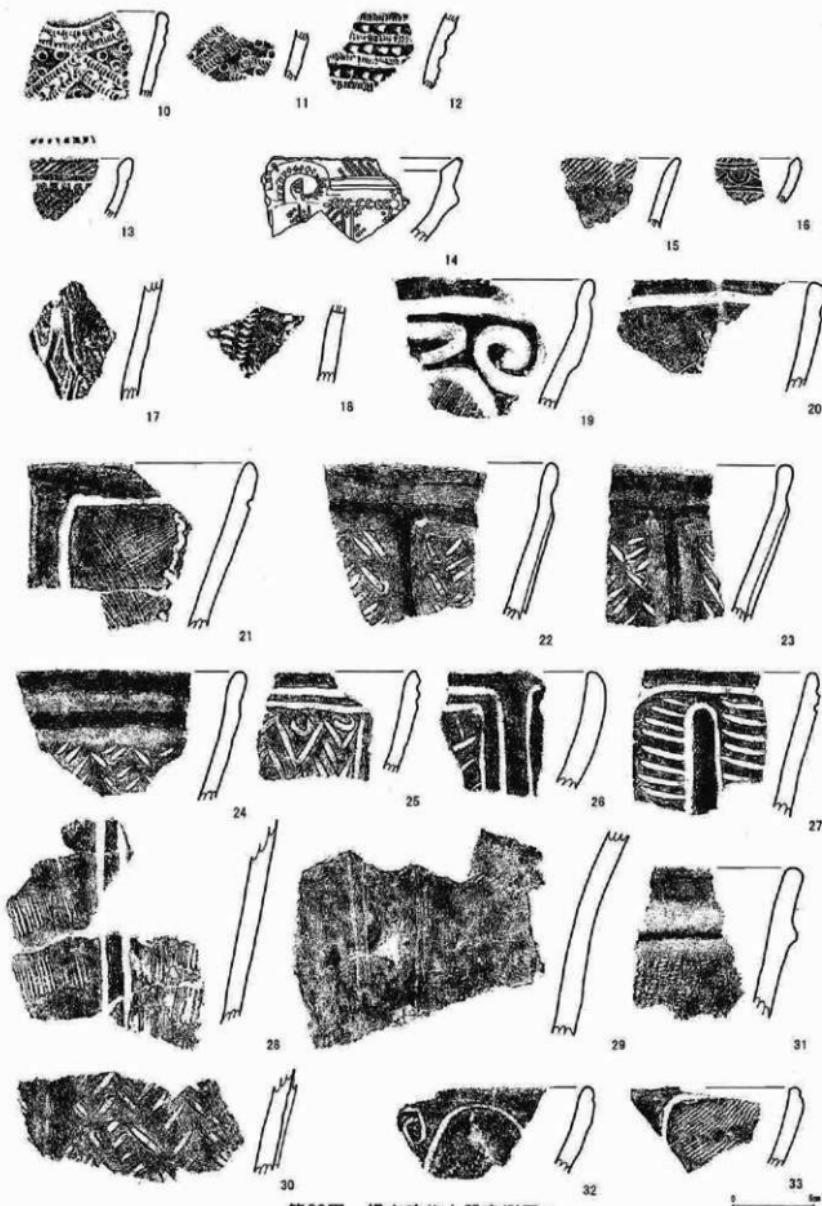
（9）SK3（第19図）

H-1グリッドで、標高123.3m付近に発見された。焼土坑である。調査時に土坑の一端を削り落としてしまったため、正確な規模は不明になってしまったが、残存している土坑の規模は、長軸0.51m、短軸0.46mで、深さ0.1mである。焼土範囲は長軸0.51m、短軸0.41mである。この焼土坑は、上部にあったSX6の礫を取り外し、掘り込みの調査をしている際に発見されたもので、SX6の礫に覆われていた。遺物は出土せず、時期は不明である。

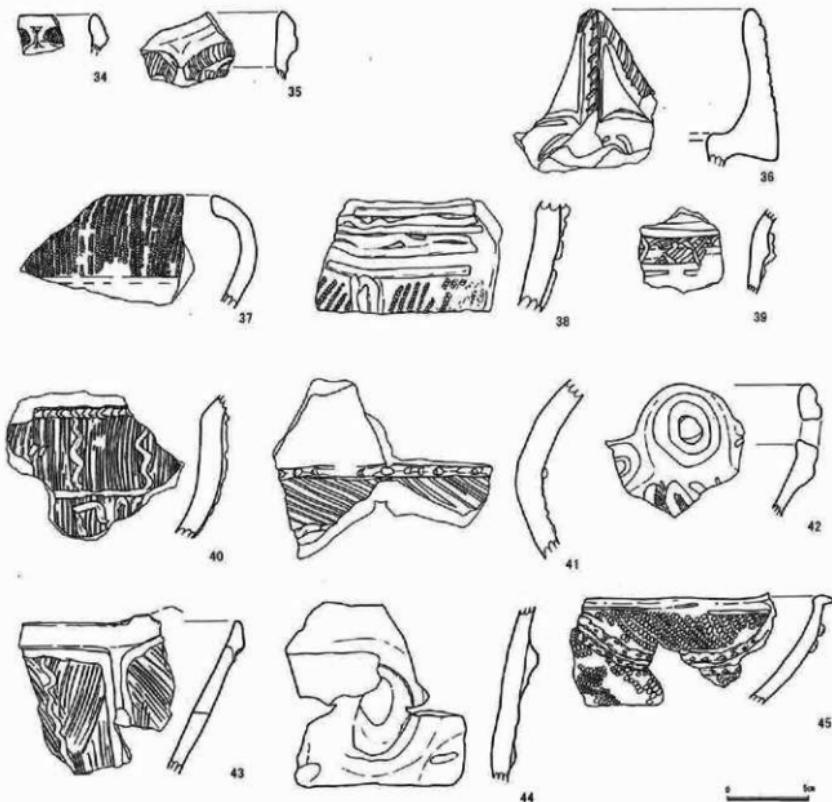
2 遺物

本遺跡の北側を流れる潤井川は、富士山麓を水源にし、本遺跡の立地する舌状台地に阻まれてその流れを東へ向ける。そのため、本遺跡の立地する舌状台地は、川に浸食されて北側は崖となっており、川面からの比高差が10mほどもある。第I次調査区・第II次調査区・第III次調査区・第V次調査区となった現富士宮市立第三中学校校庭は、丘陵の平坦面にあたり、これまでの調査でも、炉跡や埋甕、配石遺構、焼土坑といった集落跡が展開し、集落の中心であったと考えられる。本調査区は、当初、そのような丘陵の平坦面からやや外れ、丘陵平坦面から北側の潤井川へ向かって傾斜し始める、丘陵の縁辺にあたると考えられた。しかし、遺物の量は、丘陵平坦面より減るもの、これまでの調査で確認された時期と同じ時期の、縄文時代前期から後期に至るまでの土器が出土している。また、SK2のような石棒の埋納坑が確認され、これまでの調査と関連して捉えられる資料となっている。遺物の時期は、これまでの調査では、わずかではあるが、縄文時代早期前半の撚糸文土器からはじまり、前期前半の清水ノ上式土器、木島式土器、関山式土器、前期後半の諸磯式土器、中期前半の五領ヶ台式土器、北裏C1式土器、勝坂式土器、北屋敷式土器、中期後半の曾利式土器、加曾利E式土器、後期初頭の称名寺式土器、後期前半の三十稻葉式土器、堀之内式土器などの出土をみている。最も多いのは堀之内式土器で、この時期に遺跡の盛行期を向かえたと考えられている。本調査で最も多いのは、中期後半の曾利式土器で、場所による時期の違いが想定できるのかもしれない。

遺物の分布は、調査区西側のAグリッドに多く、東側に少ない。調査区東側はすでに削平を受け、栗色土層の下層が表土下に露呈する状況であったため、遺物包含層が消失しているためもあると考えられるが、概して標高の高い方から低い方へ向かって減少する傾向にある、と言える。遺物の出土状況は、ほとんどが包含層出土遺物である。



第20図 縄文時代土器実測図 1



第21図 縄文時代土器実測図2

(1) 土器

出土した土器は、破片にして総数2,466点で、うち81点を図示した。前期後半の諸磽式土器、中期初頭の五領ヶ台式土器、中期中葉の北屋敷式土器、中期前半の勝坂式土器、中期後半の曾利式土器、後期初頭の称名寺式土器、後期前半の堀之内式土器である。主体となる時期は、中期後半の曾利式土器である。多くが破片資料であり、復元しうる土器は、14点と少ない。

a. 諸磽式土器（第20図10～12）

文様は、半裁竹管状工具による連続爪形文と竹管による円形の刺突で構成されるもの（10・11）と、半裁竹管状工具による連続爪形文と押圧を加えた横位の隆帯を交互に配置するものの（12）がある。いずれも深鉢形土器と思われる。10は波状口縁であり、口縁部がやや立

ち上がりぎみに開く。

b. 五領ヶ台式土器 (第20図13~18)

18を除き、主に、半裁竹管状工具による沈線と、縄文で構成されている。すべて深鉢形土器と思われる。13~16は口縁部である。13・14・16は内湾しており、内面にはっつきとした稜を持つ。15は外反しており、焼成も、他に比べてやや軟質と、やや異質である。17・18は胸部である。やや直線的に立ち上がっている。13~17は、半裁竹管状工具と粒のそろった縄文がみられ、13には列点状に印刻が、14は、刻みを持つ字状の隆帯が貼付されている。また、13・14には、口唇部に刻みがみられる。18は三角形と爪形の連続刺突文がみられる。本調査出土資料は、五領ヶ台式土器のもう一つの特徴である、半裁竹管状工具による集合沈線がみられるものは出土しなかった。

c. 北屋敷式土器 (第21図34・35)

北屋敷式土器は、東海地方西部の縄文時代中期中葉の土器として位置づけられているが、東海地方東部である静岡県内でも、少量ながら分布していることが確認されている土器である。富士宮市も例外でなく、本遺跡のこれまでの調査で、勝坂式土器を主体とするこの時期に、数点の北屋敷式土器が出土している。

34・35はいずれも口縁部である。34は平縁、35は波状口縁である。口縁部に区画帯を設け、その区画帯に沿うように、連続爪形文をびっしりと施している。区画帯は側面から見ると三角状の突起となっている。胎土はやや白色を帶びて、薄手で硬質に焼き上げられているなど、北屋敷式土器の特徴を備えている。

d. 勝坂式土器 (第21図36)

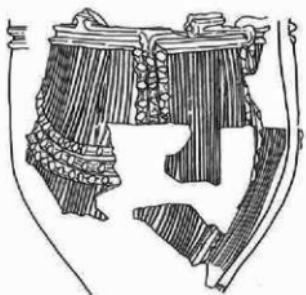
中期前半に主体となる土器で、本遺跡のこれまでの調査でも、勝坂式の後半段階の土器が多数出土しているが、本調査でみられた勝坂式土器は、極少量であった。36の1点を図示した。これも、勝坂式土器後半の資料と思われる。

36は、深鉢形土器の口縁部で、大きな三角状の突起となる部分である。器壁は厚く、隆帯と沈線で文様が構成されている。

e. 曽利式土器 (第20図19~33、第21図37~45、第22図46~52・図版15)

中期後半の土器で、富士山南麓では、この時期遺跡数が増加する。本遺跡のこれまでの調査でも、前代の勝坂式土器後半から続き、曾利式土器の前半から後半にかけて連綿と遺構の分布がみられる時期である。本調査では、出土土器中で、最も割合の高い土器群となっている。

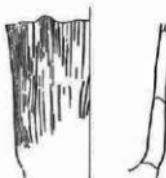
37は、キャリバー形の深鉢形土器口縁部で、口縁部が丸く膨らんでおり、全面が縄文で覆われている。38から41・45・46は、胸部に粘土紐を貼付して装飾するもので、頸部に38は波状隆帯、39は格子状の隆帯が見られる。40は、蛇行する隆帯を胸部に懸垂している。41は刺突の入る隆帯を頸部に巡らせている。45は、口縁部に刺突の入る隆帯を弧状に展開している。46は、頸部には隆帯を数条つけ、胸部には押圧を加えた隆帯を2条から3条、懸垂して抽象的な文様を展開している(図版15)。地紋は、縄文であるものが37・38・45で、40は縦位の条線、41は斜位の条線である。48は、S X 1出土資料である。胸部に縦位の条線がみられるものである。以上は、いずれも深鉢形土器であり、曾利式土器のI式からII



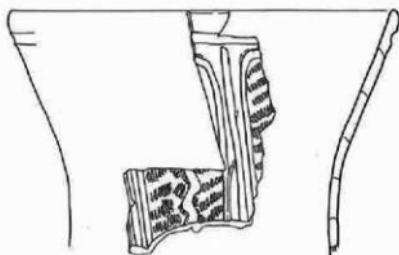
46



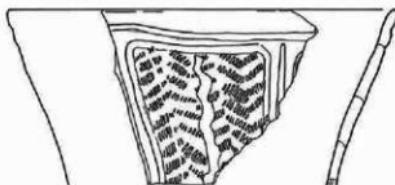
47



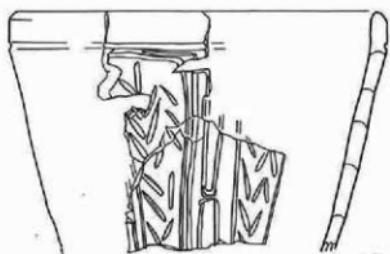
48



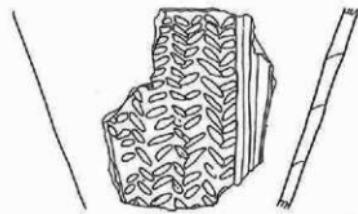
49



50



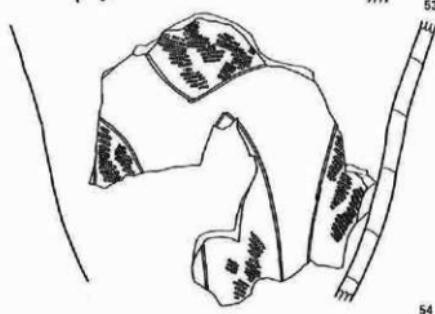
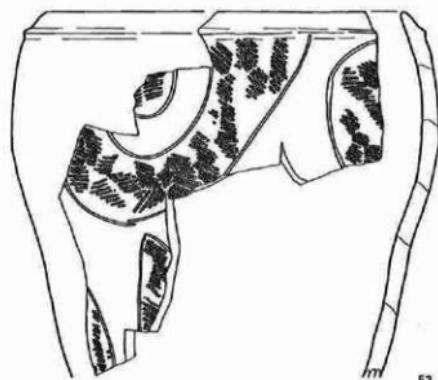
51



52

1 cm

第22図 繩文時代土器実測図3



第23図 縄文時代土器実測図4

— 5cm —

式の特徴と考えられる。

19から21・42・43は、胴部に綾杉状条線が見られるものである。口縁部には、19は沈線による渦巻状文が見られ、20には横位の沈線、21・43は沈線による口区画内に、沈線化した蛇行懸垂文が見られる。42には、口縁部に渦巻状の把手が付けられている。28・47・49・50は櫛齒状列点文が八の字に連続して付けられているもので、49・50には、沈線による区画内に沈線化した蛇行懸垂文が見られる。22から26・30・51・52は、胴部に連続する八の字文が見られるもので、22から24は隆帶による口区画、25・26・51・52には沈線による区画が見られる。以上は、曾利式土器のIII式からV式の特徴と考えられ、いずれも、深鉢形土器と考えられる。前述の曾利I・II式土器よりも、曾利III・IV・V式土器の方が多く、うち特に曾利V式の特徴である、連続八の字文が見られる土器が最も多い。

27は、キャリバー形の深鉢形土器に沈線で口区画が見られ、中に斜線と逆U字形の沈線が見られる。やや異質であるが、口区画が見られ、文様が沈線で構成されるため、曾利式土器に分類した。また、44は、表面の剥離が著しいが胴部に渦巻き文が見られるため、曾利式土器に分類した。

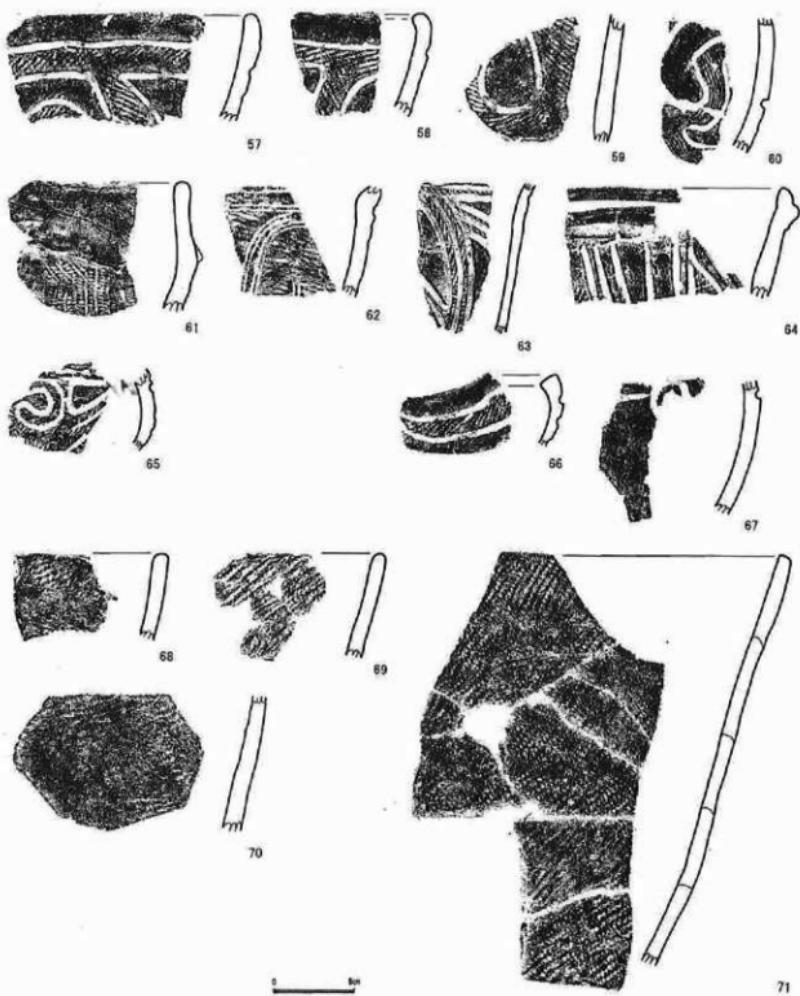
f. 加曾利E式土器（第20図31～32・第23図）

富士山西南麓は、曾利式土器が主体となる文化圏であり、加曾利E式土器は、数量的に少ないことが確認されている。また、両者の折衷と思われる土器もあるため、分離するには困難なものも多い。本調査で確認された加曾利E式土器は、31から33・53から56である。うち、53と54、55と56はそれぞれ同一固体である可能性が高い。

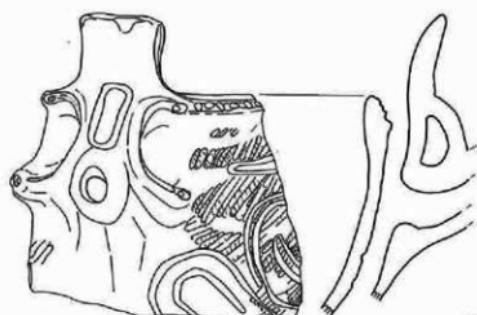
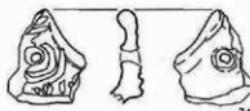
31は、やや直立ぎみに外反する口縁部に横位の隆帶が付けられ、その下には縄文が見られる。32・33は内湾する口縁部に、沈線で区画がされ、中に縄文が見られる。32には、沈線で小さな渦巻き文が見られる。

53・54は、大型の深鉢形土器になると考えられる。器形はくびれの弱いキャリバー形で、内湾する口縁部には隆帶が付けられている。胴部上半には渦巻状に沈線で区画された中に磨消縄文が見られ、胴部下半には、底部からやや先端が尖った連続する逆U字形に沈線で区画された中に磨消縄文が見られる。55は、口縁部に向かってやや大きく広がる、くびれの強いキャリバー形の深鉢形土器で、口縁部には、沈線で渦巻き文と横広の区画帯が設けられ、横広の区画帯には磨消縄文が充填されている。口縁部文様帯から下は、縦位の沈線で区画された中に磨消縄文と蛇行懸垂文が見られる。この蛇行懸垂文は、磨消縄文と同じ原体を使った縄文でつけられているようである。頸部には、横位の沈線が2条巡っており、この沈線間は無文となっている。56は、頸部から胴部にかけての部分で、頸部には、横位の沈線が2条巡り、口縁部の縦位の沈線に繋がっている。沈線による口区画内には、磨消縄文が見られ、55と同じく縄文による蛇行懸垂文が見られる。

53・54は口縁部文様帯が消失する加曾利E式土器の後半のもので、文様の簡略化が著しい加曾利E4式の段階と考えられる。55・56は、口縁部文様帯があり、縄文を地紋とする点は加曾利E式土器の特徴を示し、加曾利E式土器の前半のもので、縦位に蛇行する懸垂文があるので、加曾利E1式の段階と考えられる。



第24図 縄文時代土器実測図 5

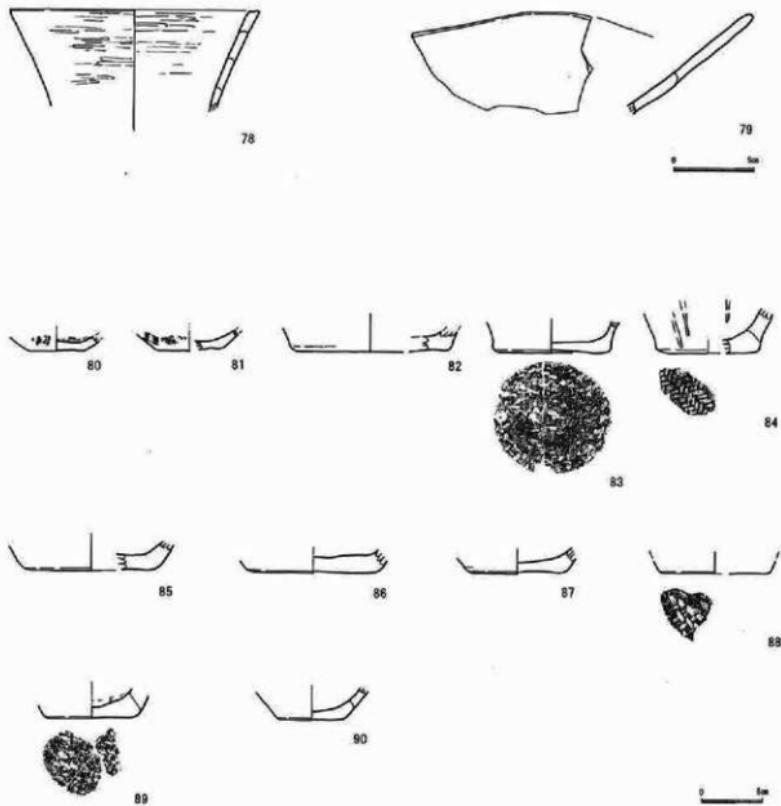


— 5mm —



— 5mm —

第25図 縄文時代土器実測図 6



第26図 縄文時代土器実測図7

g. 称名寺式土器（第24図57～60）

後期初頭に位置づけられる土器であり、本遺跡のこれまでの調査でも、一定量出土している土器である。57から60のいずれも、深鉢形土器で、磨消縄文と沈線で構成されている。

57・58は口縁部で、やや内湾している。文様は、鉤状文あるいは丁字文になるかと思われる。59・60は胴部で、59は鉤状文あるいは丁字文と思われ、60は鉤状文が上下反転して連鎖している様子が見られる。称名寺式土器は、磨消縄文と沈線で文様を密に連続して展開するI式と、文様が個々に分離する傾向をみせ、また縄文から列点に変化するII式とに分類されている。本調査出土資料は、破片資料であり、全体の文様展開は不明であるものの、磨消縄文が見られることから、称名寺I式土器の段階になるかと思われる。

h. 堀之内式土器（第24図61～65・第25図・図版16）

後期前半に位置づけられる土器であり、本遺跡のこれまでの調査では、最も破片数の多い土器である。しかし、本調査では、一定量の出土にとどまった。

61・62・75は、縄文を地紋とする深鉢形土器で、くびれの弱いキャリバー形と思われる。61は隆帯による、62・75には沈線による曲線的な文様がみられる。また、75は口縁部に突起とX状の把手が付けられ、かつ把手部分には注口部が取り付けられている特殊な土器である（図版16）。63・64は、3条の沈線と縄文とを組み合わせた、直線的で幾何学的な文様が見られるもので、やや直線的に立ち上がる器形の深鉢形土器と思われる。71から74は口縁部で、突起状になっている。彫りの深い沈線と刺突で文様が構成されている。76・77は、頸部が強くくびれ、口縁部は無文となり大きく広がり、胴部も丸く大きく膨らむ朝顔形の深鉢形土器である。76は、口縁部に粘土紐が懸垂され、頸部には横位の沈線が巡り、胴部には沈線で曲線的な文様が見られる。65は、注口土器の胴部である。刺突を持つ隆帯が横位に巡り、その下に沈線で曲線的な文様が見られる。地紋は縄文である。

堀之内式土器は1式と2式に主に分けられている。本調査資料は、2式の特徴とされる幾何学的で簡素な文様ではなく、渦巻状や蕨手状の文様であり、また地紋に縄文が使用されているものが多く、堀之内1式の時期と考えられる。

i. 加曾利B式土器（第24図66・67）

後期中葉の土器で、本遺跡のこれまでの調査でも、一定量出土している。本調査ではわずか2点の出土であった。

66は、横位の磨消縄文帯と無文帯が見られる深鉢形土器の口縁部で、波状口縁である。器面を丁寧に磨き、黒色化させている。67は横位の文様帯を区切るの字状の沈線が見られる。器面を丁寧に磨き、黒色化させている。浅鉢形土器になるのかもしれない。

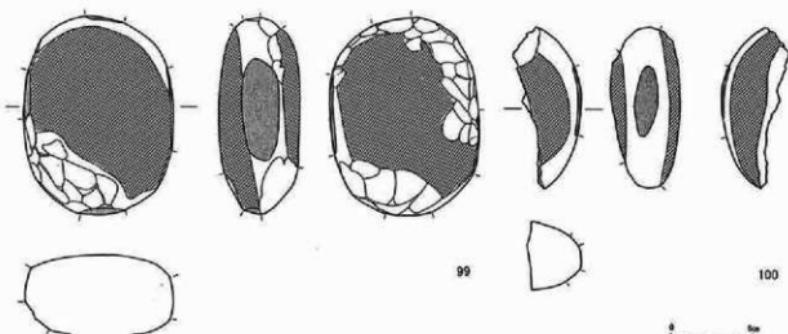
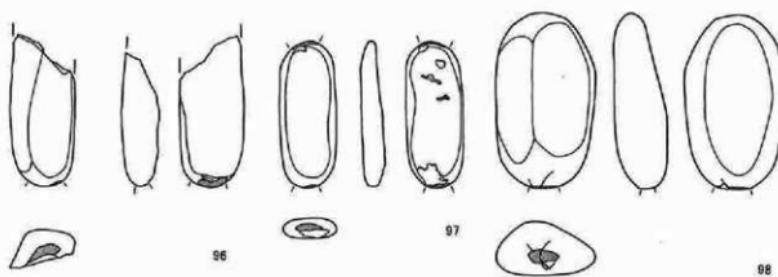
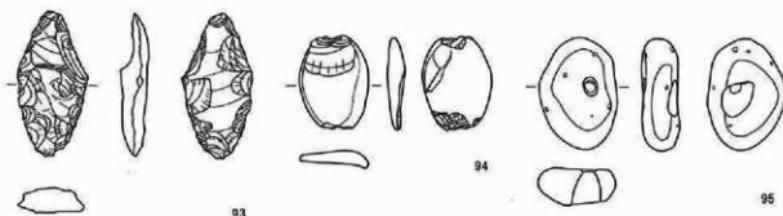
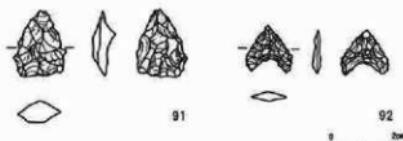
j. そのほかの土器（第24図68～71・第26図）

縄文のみ見られる土器（68～71）と、無文の土器（78・79）、底部（80～90）である。68・69・70は、口縁部で、平縁である。いずれも深鉢形土器で、口縁に向かって緩やかに外反している。78・79は、口縁部で、78は平縁で79は波状口縁である。78は器面は内外面とも丁寧に磨かれており、黒色化している。78も、器面は磨かれているが外面のみ見られる。また、外面のみ黒色化している。78・79は、器面が磨かれている点などから、加曾利B式土器かと思われる。80・81は、縄文が見られる。底部の形態は両者とも良く似ているが、80は内面のみ磨かれており、81は内外面とも丁寧に磨かれており、内面は黒色化し、赤外面には彩が見られる点に違いがある。加曾利B式土器かと思われるが、器形はわからない。82から90は、底部が厚く、底部内面が比較的平らになるもの（82・83・85～87）、底部が厚く、内面が擂鉢状になるもの、底部が薄く、内面の底部と胴部の境が明瞭でないもの（90）がある。

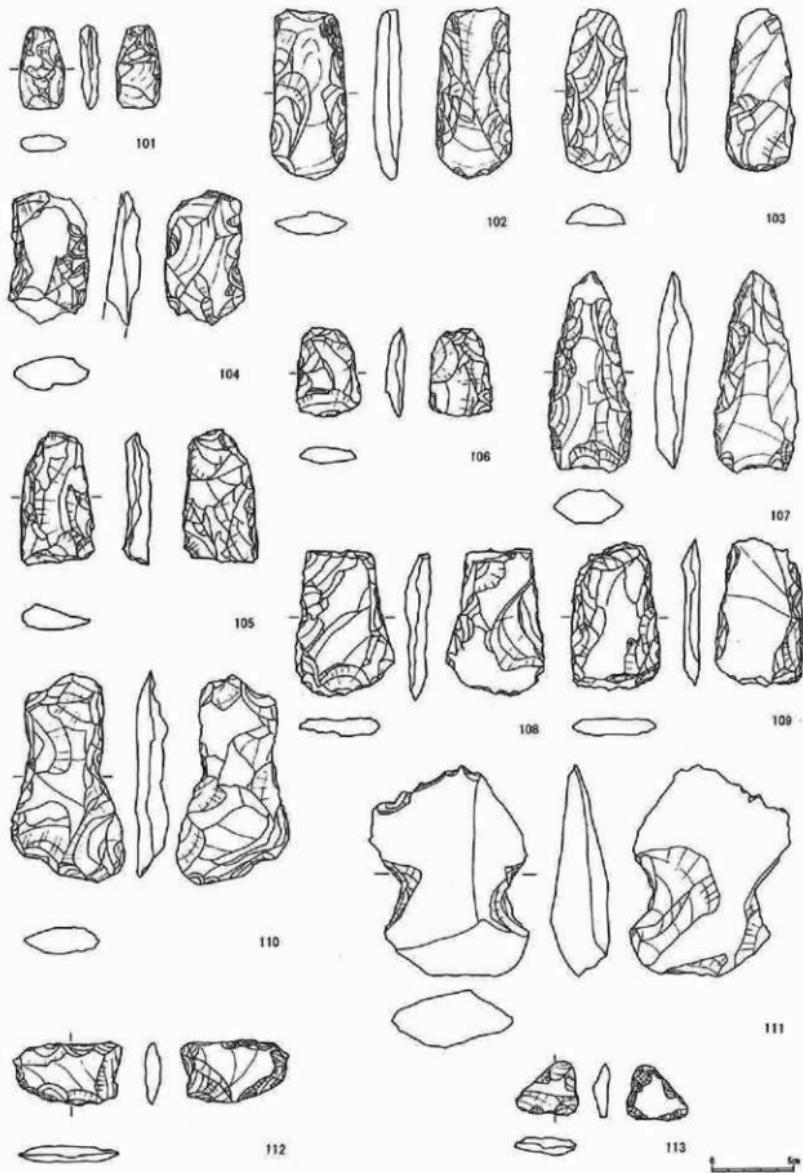
（2）石器

a. 石鏃（第27図91・92・図版17）

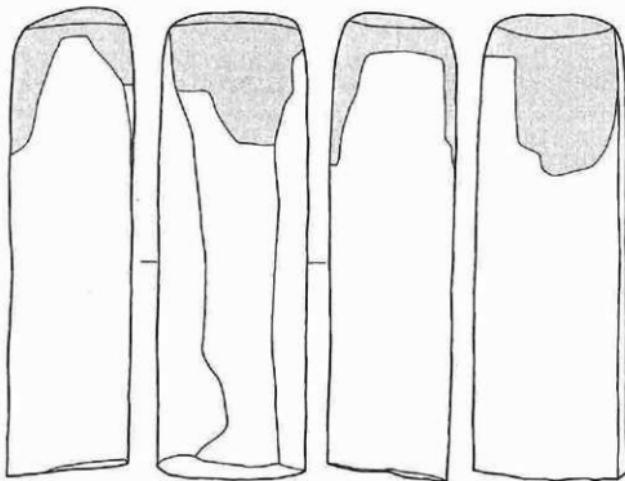
石鏃は2点出土している。2点とも打製のものであり、基部の形状から2類に分けられる。いずれも石材は黒曜石である。91は長2.0cm、巾1.6cmで長さのない二等辺三角形状の



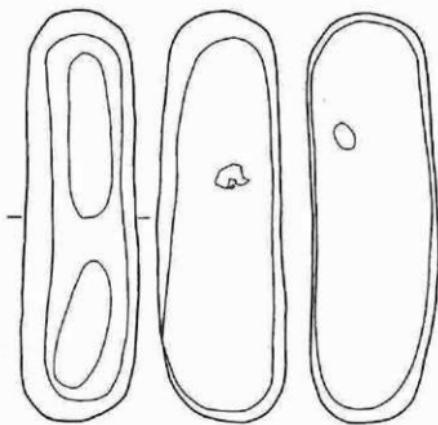
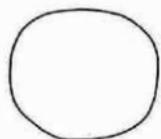
第27図 縄文時代石器実測図 1



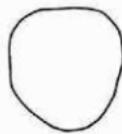
第28図 縄文時代石器実測図 2



114



115



第29図 桶文時代石器実測図3

中型鎌である。基部は平基で、調整は粗雑な感を受ける。92は長1.4cm、巾1.4cmの中型鎌である。基部の抉入は1/4~1/5程度認められ、調整は比較的丁寧で剥離が全面を覆おう状態である。

b. 尖頭器（第27図93・図版17）

尖頭器は1点出土している。石材は頁岩であり、両面共に全縁にわたって比較的に丁寧な調整がなされている。法量は長さ8.9cm、巾4.3cmである。

c. 石錐（第27図94、95・図版17）

石錐は2点出土している。縄掛けの刻みによって3類に分けられる。本調査ではII類（打ち欠きによる疊石錐）、III類（I、II類以外のもの）が出土している。

II類（94） 94は長5.6cm、巾4.2cmの扁円形であり、上下の端部に打ち欠けが認められる。石材は砂岩である。

III類（95） 95はI、II類とは異なり、上下端部に打ち欠きが見られないものである。長6.8、巾4.8cmの自然石の中央部に穿孔を持つ楕円形をなす。この孔に紐を通して石錐として使用されていたと考えられる。

d. 敲石（第27図96~100・図版17）

敲石は5点出土している。その形態からI類（棒状のもの）、II類（扁円形のもの）に分けられる。

I類（96・97） 96は半分以上が欠損し、下端部のみが残存する。この下端部に敲きが認められる。97は上下端部に敲きが認められる。石材はともに頁岩である。

II類（98、99） 98は長10.7cm、巾6.1cmの縱長の楕円形をなす。下端部に敲きのみが認められる以外には調整が認められない。99は長12.0cm、巾9.3cmの円形をなす。磨面が表裏面に認められ、側面や上下の端部には敲きが認められる。また、表面の一部分にススの付着が認められる。100も96同様、半分以上が欠損している。残存する表裏面に磨面が認められ、右側面には敲きが認められる。

e. 磨製石斧（第28図101・図版17）

磨製石斧は1点が出土している。法量は長5.1cm、巾2.5cm、厚1cmと小型のものである。研磨は表裏及び両側面になされているが、上下の端部にはなされていない。

f. 打製石斧（第28図102~111・図版17）

打製石斧は9点出土している。本調査ではI類（短冊形のもの）、II類（楔形のもの）、IV類（分銅形に近い形状をし、頭部に複数の凸部を見るもの）に分けられる。

I類（102~105）は、形状、刃部の違いからa（もっとも短冊状のもの）、c（小型で錐状のもの）に細分化される。102は長10.5cm、巾4.7cmをはかる。左右側面に調整がなされているが、粗雑感を受ける。石材は砂岩である。103は長さ10cm、巾4.2cm、厚さ、1.2cmをはかり、表裏面共に粗雑な調整がなされている。

104は上下の端部共に欠損している。表面に自然面が残されており、左右側面に粗雑な調整が認められる。石材は頁岩である。105は長さ8.0cm、巾4.5cm、厚さ1.75cmであり、全面を剥離で覆われている。調整は粗雑である。石材は砂岩である。107は長さ12.0cm、巾4.3cm、厚さ1.9cmであり、上端部以外に執拗な剥離調整がなされ、先端部を尖らせている。102~

105、107は刃部の形状からa類にあたる。石材は頁岩である。106は長さ5.4cm、巾3.9cmの小型の石斧であり、刃部の形状からc種にあたる。周縁には調整がなされているが、粗雑である。II類(108~110)は、擬形のもので刃部の違いからa(刃部が弧状のもの)、b(刃部が直線的なもの)と細分化される。石材は砂岩である。108は長さ8.9cm、巾6.1cm、厚1.6cm、109は長さ9cm、巾5.5cm、厚さ1.1cmをはかり、共に刃部の形状からa種とされる。両者は下端部に剥離面からの調整剥離によって刃部を作り出している。110は長さ12.8cm、巾6.9cm、厚さ1.6cmをはかり、刃部の形状からb類上端部以外には、左右側面は比較的細かい調整剥離がなされている。刃部は使用により若干の摩滅が認められる。IV類(111)

111は長さ12.9cm、巾9.9cm、厚さ3.5cmであり、分銅形に近い形状をなす。上端部に剥離面側から調整剥離によって刃部を作り出しており、左右側面及び細かい調整が認められる。石材はホルンフェルスである。

g. スクレイバー類(第28図112・113)

スクレイバー類は2点出土している。刃の施される位置により2種類に分けられるが、本調査で確認されたのはI類(横長の剥片の下部に刃をもつもの)のみである。

112は、長6.6cm、巾3.9cmの横刃形のものである。全縁に調整が認められるが、左右側面及び下端には意識的に刃部の作成が認められる。石材は砂岩である。113は、長3.3cm、巾2.7cmの小型三角形をなす。表面は調整不足であるが、裏面は全縁に細かい調整が認められる。

h. 石棒(第29図114・115・図版18)

石棒は2点出土している。114は長さ33.5cm、巾12.2cm、厚さ10.1cm、重量9.3gで、下端部の1/2程度が欠損している。上端部に強い成形による磨き、表面等に弱い成形による磨きが認められる。115は長さ33.5、巾9.7、厚さ10.0cm、重量5.8gである。自然疊の角に丁寧な磨きがかけられており、表面の一部には自然面が残されている。

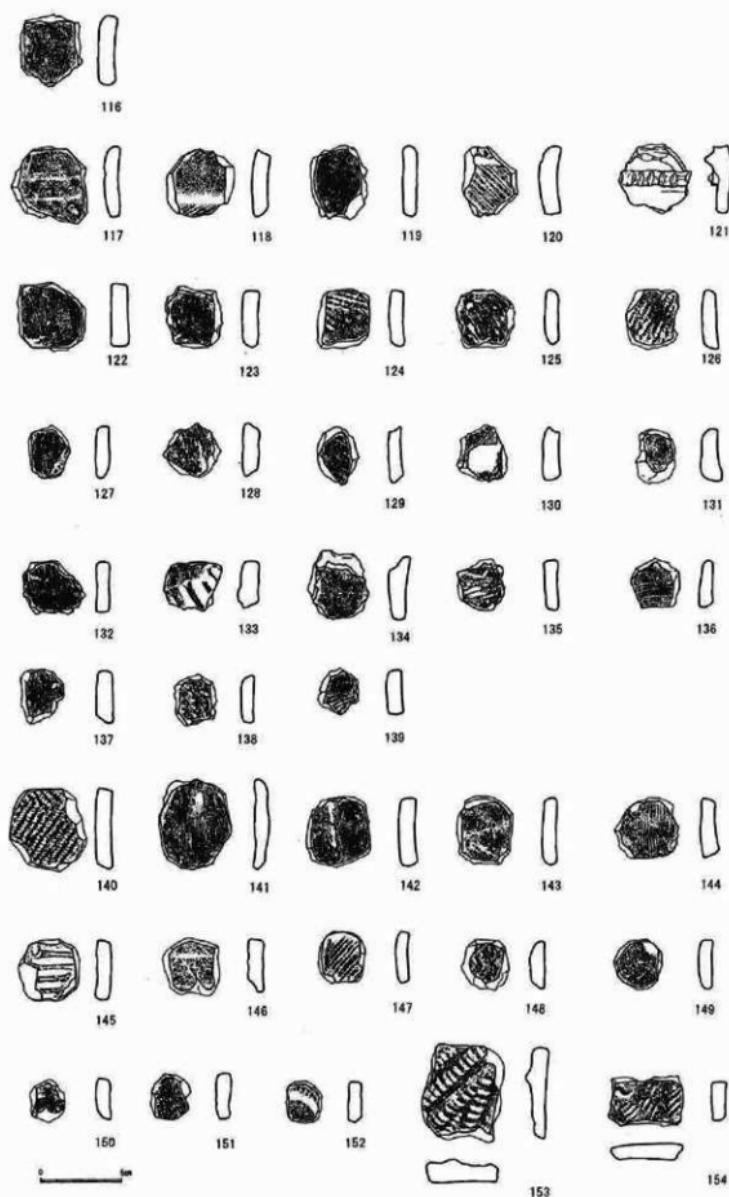
(3) 土製品

土製品として土器片円盤、土器片錐が出土している。この土製品は、いずれも土器片を意図的に「再利用」したものである。本調査での出土点数は、土器片円盤が37点、土器片錐は2点の計39点であり、前回の調査で得られた数量よりも下回る。また、前回の調査と同様、いずれも偏在的な出土状況であり遺構に関わるものはみられなかった。

a. 土器片円盤(第30図116~152)

土器片円盤は、土器片の周縁の一部または全面に加工痕が認められる円形ものであり、縄文時代から近世に至るまでの遺跡での出土が確認されている。しかし、その性格については様々な諸説があり未だ明らかにされていない。

土器片円盤は、加工方法の違いによりI類(打ち欠き未調整)、II類(打ち欠き後、一部調整)、III類(打ち欠き後、周縁調整)に分けられる。前回の調査で得られた土器片円盤は、I類が最も多く出土し、III類が希少的とされている。しかし、本調査ではII類・III類の順に多く出土し、I類が1点のみと前回とは大きく異なる結果が得られた。この違いについて本調査の内容のみから明らかにすることはできなかった。



第30図 繩文時代土製品実測図

分類別に法量をみると、II類の平均法量は長3.4cm、巾3.1cm、厚1.0cm、重12.9g、III類の平均法量は長3.5cm、巾3.2cm、厚1.0cm、重14.3gをはかる。平均数値から見るとIII類の方が上回るが、分類別での平均法量には大差はみられない。転用された土器は、II類・III類ともに曾利式土器が多い。

b. 土器片鍤（第30図153、154）

土器片鍤は、様々な四辺形をなし1ヶ所以上の縄掛けと考えられる切込みが主に長軸方向に認められるものであり、使用用途は一般的には漁網のおもりとして考えられている。土器片鍤は、縄掛けの刻みによってI類（擦り切りのみ）、II類（打ち欠きのみ）、III類（打ち欠き後、周縁調整）に分けられる。本調査では2点出土している。153は長さ5.3cm、巾4.4cm、厚さ1.3cmであり、154は長さ2.8cm、巾4.4cm、厚さ1.0cmをはかる。共に打ち欠きのみの調整であることからII類に相当する。

《文献》

- 加藤晋平、鶴丸俊明1980『図録 石器の基礎知識II一先土器（下）』柏書房
加藤晋平、小林達雄、藤本強1981『縄文文化の研究 第4巻 縄文土器II』雄山閣
加藤晋平、小林達雄、藤本強1983『縄文時代の研究 第7巻 道具と技術』雄山閣
シンポジウム実行委員会1998静岡県考古学シンポジウム‘97 第五回東海考古学フォーラム『縄文時代中期前半の東海系土器群について一北屋敷式土器の成立と展開』静岡県考古学会
柴田徹2005『川原の石のCD岩石鑑定図鑑』考古学石材研究所
鈴木道之助1981『図録 石器の基礎知識III』柏書房株式会社
戸沢光則1994『縄文時代研究辞典』東京堂出版
岡村淳1981「再利用土器片について」『横浜市高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書』同調査団
富士宮市教育委員会1997『滝戸遺跡』

第V章 まとめ

滝戸遺跡に対する6回目の発掘調査となる今回の調査では、縄文時代中期～後期と弥生時代後期を主体として遺構、遺物の発見が認められた。これらは、過去の発掘調査での一連の研究成果を追認する状況で、遺跡の広がりとして評価されるものとなった。市立第三中学校敷地外での調査は、潤井川の河岸に対する滝戸遺跡第IV次発掘調査以来2度目となるが、遺跡の立地する台地の北側部分に対する様相の解明に繋がる貴重な出土品が発見されている。

1 縄文時代

狭小な調査区ながら多数の遺構、遺物が発見された縄文時代のものは、縄文時代中期～後期を主体としているが、縄文時代前期諸穢式土器や後期加曾利B式土器の出土も認められており、遺跡の消長を考える上で、重要な情報を提供している。

従前の発掘調査で、滝戸遺跡が最も盛行期を迎えるのは縄文時代中期前葉五領ヶ台式土器から後期前葉堀之内式土器までであることが判明しているが、今回の発掘調査でも当該期の集石、土坑などが発見されている。明らかに遺構に伴う土器類がないため、その年代はよく分からぬが、一定の集中域を持って発見されている。東西に長い調査区に対して3箇所、集中する場所が指摘されるものであるが、西側の集中域では、径1m程度の集石の集合として認識されるものである。中央の大型礫を中心に礫が配されているSX1と均一な拳大の礫で構成されSX2とが確認されている。SX1には、曾利I式期の土器が混在して発見されている。

広い広がりを持つSX5を中心とした中央の区域では、SX4、SX5、SK1の3基の集石が認められるものであるが、大小様々な礫により構成される大規模なSX5と大型の礫が目立つSX4、扁平で拳大の礫を集め、浅い掘り込みを伴うSK1とそれぞれ異なる形態を示している。層位的な検討では、SK1→SX5、SX4と時間的な関係が指摘されるものである。また、SX5については幅3mほどを測り、礫の集中が著しいものである。滝戸遺跡第V次調査で発見されている配石3に類似するものであるが、配石3の最下部における扁平の河原石の配列は確認されていない。この配石3には、隣接して堀之内I式期の埋甕11が発見されており、時間の設定を可能にしている。

調査区の東側で確認された3基の遺構は、SK3→SX6→SK2の順で新しくなる。大小の礫が混在するSX6は、SX1と同形態のものと捉えられるが、やや規模が大きくなる。この集石の下からは、焼土を充填した土坑であるSK3が発見されている。SK3は、SX6の北側で、その縁辺を構成する人頭大の礫の下にあり、相互に関連する可能性を持つものである。

今回の調査において、特に注目される遺構は、石棒を埋納するSK2とした土坑の発見であろう。発見されている場所が、丘陵の縁辺部で、この辺りから潤井川方向に傾斜が強くなる地形的な変換点に当たる。それは、集落遺跡の周辺部に当たる場所でもあり、整然とした石棒の埋納形態などを検討すると、何らかの儀礼的な行為を窺わせるものとなっている。

このように、発見されている遺構は、集石を中心に多彩な様相を示すものである。その中で、集石は、3種類以上に分類されるものである。このような実態は、過去の発掘調査でも指摘されていたことであり、同様の状況を示していることが分かる。

時代的には曾利式後半段階が主体であることが、出土土器の検討から指摘できる。これは、今回の調査地点とその南側で近接する滝戸遺跡第Ⅲ次調査地点の状況と合致しており、その関連が窺われる所以である。第Ⅲ次発掘調査では、曾利5式期の埋甕2基と曾利3式期の焼土を内包する土坑1基が発見されている。これらの時期は第Ⅱ次調査区で発見されている曾利2式期の竪穴住居群による居住域が廃絶された後、再度、滝戸遺跡において集石や配石、埋甕などが築かれる段階のものであり、滝戸遺跡の集落（墓域）が最もその範囲を広げ、その經營が最も活発になる時期に相当するのである。

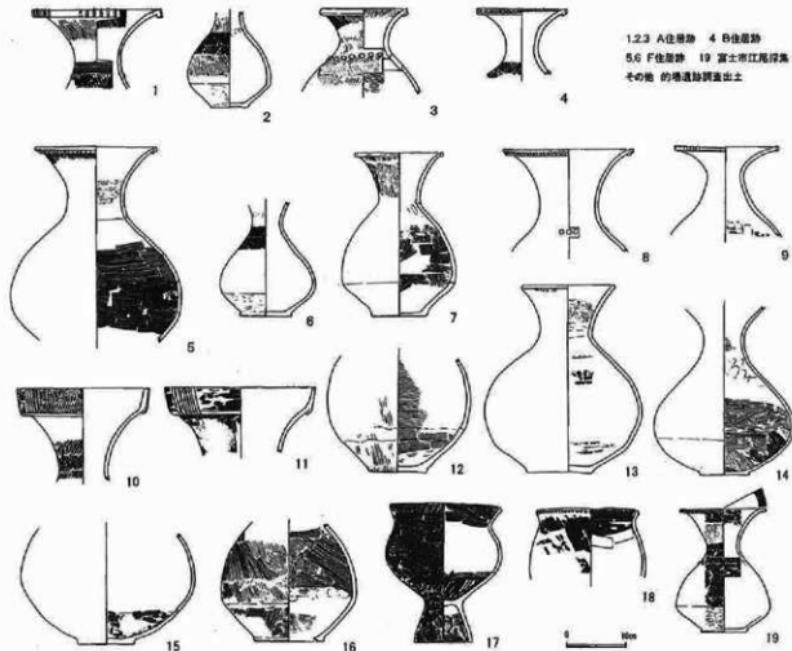
今回の調査では、集石などの遺構の発見と同時に遺物包含層から多量の土器が出土しているが、具体的な関連についてはよく分かっていない。今後の滝戸遺跡の立地環境を考慮して、総合的な見地から検討していかなければならない課題である。

2 弥生時代

(1) 遺跡の年代

今回の調査では、弥生時代以降の竪穴住居などの年代が確実に分かる遺物の出土は認められていない。4軒以上の竪穴住居等の存在が明らかであるものの遺構毎の年代は把握できない。しかし、調査全体を通して採集、発見されて遺物類を検討すると、弥生時代後期以降の時期の遺構群であることは指摘される。第10図-1や8を見る限りでは、雌鹿塚Ⅱ式期（富士宮市教育委員会1997）以降のものであると判断される。特に、1に見られる端末結節は、雌鹿塚Ⅰ式期以前には認められない文様である。また、7は高坏として周辺でその類例をほとんど見ることのない型式である。小破片のため適切に対応されないが、西遠江地域の伊場式土器の影響が考えられそうな形状を示している。伊場式土器でもその終わりころに対応するものであろう。脚部下半が内彎気味に開く点でその類似性が指摘される（（財）浜松市文化協会1991）。

S B 2 と S B 3との重複関係からも竪穴住居からなる集落遺跡として一定の時間でその經營の行なわれていたことは分かるものである。滝戸遺跡のある富士山西南麓では、丸ヶ谷戸遺跡、上石敷遺跡、月の輪平遺跡、泉遺跡など大麻Ⅰ式期の集落遺跡（居住域・墓域）が調査されているが、すべて伊勢湾沿岸地域や畿内などの影響を受けた土器型式（形式）を土器様式の型式組成に含んでいるものである。明らかに、この地域においては、外来系土器の搬入が土器様式の成立に大きく関与している実態が指摘されるのである。今回の調査においては、表土中で発見された土器類をも含めて、伊勢湾沿岸地域や畿内あるいは北陸系などをその淵源とする類例の発見はない。東駿河の場合、在来系土器の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての型式変化の度合いが小さく、型式的な属性を数量的な変化の中で辿ることが難しい状況を踏まえると、外来系土器の有無が、現状では、時代を画する大きな要素となっているのである。特に、外来系土器が土器組成の構成要素として在地化が進行する古墳時代前期の大麻式土器の中段階（大麻Ⅲ式期）以前の段階は、その形式組



第31図 富士市的一場遺跡出土土器実測図

列の検討によって設定される場合が多い。発掘調査で発見されている遺物の構成を見ると、今回、出土した土器は弥生時代後期～古墳時代前期のものであると捉えられる。ただし、外来系土器の出土が明瞭ではない点を踏まえると、その主体は弥生時代後期にあるのではないかと思われる。発見された遺構の状況と少量の土器だけでは具体的な事は検討できないが、従前の淹戸遺跡の発掘調査で得られた成果からはその年代を想定するに大きな誤りはないものと思われる。集落としての竪穴住居群は、やや年代幅を考慮しても、弥生時代後期～古墳時代前期前半の集落を形成していた一部であると判断される。そして、今回の調査区の東側で実施された淹戸遺跡第V発掘調査で調査されている当該期の集落の西側に対する居住域の広がりが判明したものと理解されるのである。

(2) 弥生時代集落の動向

今回の発掘調査で発見された建物群の構成により、遺跡の立地する丘陵中央部からの弥生時代後期集落の広がり、今回の調査区の範囲まで及ぶことが判明した。遺跡の立地する丘陵は、北東側に展開する舌状の丘陵で、南西側は白尾山へ緩やかな傾斜を保ちながら徐

々に高くなる以外は、潤井川や谷戸により地形的に区画され独立性の強い丘陵である。淹戸遺跡第V次発掘調査では、この丘陵部の中央付近で著しく重複する遺構が発見されている（富士宮市教育委員会1997）。この調査区は今回の調査区から南へ50mほどの地点で地点に当たり、弥生時代後期後半の居住域と古墳時代前期の居住域及びその廃絶後に形成された古墳時代前期後半の墓域が発見されている。同様にその南側で近接する第1次および第2次発掘調査区においては、居住域と墓域の重複が認められ、散在する状態ではあるものの弥生時代後期の居住域と古墳時代前期前半の墓域が確認されている。また、潤井川の河岸部分に対して実施された第IV次発掘調査では、弥生時代後期の墓域と古墳時代前期前半の居住域が調査されている。このように、淹戸遺跡に対する6回の調査によって淹戸遺跡の丘陵における土地開発の様子が徐々に解明されようになっている。居住域は、丘陵南側を主体として弥生時代後期の集落が築かれ、古墳時代前期前半にはその北側の範囲を中心としている。今回の調査区は、弥生時代後期の集落域の北限に近い部分に当たり、第IV次発掘調査で発見されている墓域とを区画する境界部分に近い場所に相当するものであると捉えられる。

墓域は、年代毎にその形成場所が大きく変化している様子が判明している。弥生時代後期は、第IV次発掘調査地点を中心とした潤井川の河岸である丘陵の北側の地区において墓域が築かれており、古墳時代前期前半では、第I・II次発掘調査地点周辺の丘陵南側での展開が認められている。そして、丘陵の中央部では古墳時代前期後半に1基の方墳が構築されている。この方墳は、現状では単独で発見されており、群集していない。今回の調査地点においても墳墓等に関連する溝等は確認されていないので、大きく群集する可能性は低いようである。

淹戸遺跡の場合、同時期の遺跡として、北側に近接する丘陵上に大中里坂上遺跡があり、南側には、野中向原遺跡がある。また、潤井川の対岸には、弥生時代後期前半に拠点的な集落を經營していた泉遺跡が位置する。そのため、これらの遺跡との関連の中で、広域的な展開を示す集落遺跡の性格付けを経て、淹戸遺跡の墓域の形成を考えなければならないものである。但し、淹戸遺跡や泉遺跡の周辺は、潤井川中流域における弥生時代後期の遺跡集中個所として捉えられるものであり、拠点的な集落遺跡の形成された地帯としておおきく評価されるのである。

潤井川流域を含める富士川流域から浮島ヶ原周辺では、弥生時代後期前半の遺跡として浮島ヶ原に面する丘陵上にある的場遺跡（第31図）や海岸線の自然堤防上にある柏原遺跡などが上げられる。富士地区における弥生時代後期における遺跡の登場の様子を伝えるものである。竪穴住居址で構成された集落が調査されている的場遺跡（富士市教育委員会1986）は、愛鷹山から続く南麓の丘陵部に位置する遺跡で、眼下に広大な浮島ヶ原を望んでいる。発見されている竪穴住居は、すべて雌鹿塚II式期のものであり、その廃絶時期が推測されるが、調査で発見されている土器類には、第31図-9、10など雌鹿塚I式期に比定される事例が含まれており、集落出現の時期を反映している。未発達な折り返し部の付される9は肩部から長く緩やかに内傾する頸部を形成して口縁部が短く外反するもので、弥生時代中期の壺の器形を踏襲するものである。10は加飾性の強い複合口縁壺で、複合部と肩部へ

頸部にかけて幅広の文様帶の認められるもので、細長い頸部が特徴的である。このような事例は、静岡県東部においては、沼津市域の雌鹿塚遺跡、尾崎遺跡、豆生田遺跡などで確認されており、狩野川の沖積平野から海岸部において展開している様子が知られている。このように、海岸部から沖積平野あるいは平野部に直接関係する丘陵部などにかけて登場する弥生時代の後期集落は、富士地域において的場遺跡周辺でその動向を追うことができる。

弥生時代後期の遺跡は、特定の立地環境の中で出現し、以後弥生時代後期の中でその数を増やしながら、新たな展開を示している。的場遺跡が雌鹿塚II式期を以ってほぼ終焉を迎えるのに対して、同じ愛鷹山山麓では弥生時代後期後半の向山遺跡が登場している。また、この段階から富士山西南麓に対する新たな開発も開始されるのである。弥生時代後期の遺跡は、今回の調査地点周辺の他に、星山丘陵上の月の輪上遺跡や下谷戸遺跡の区域、富士山の傾斜地に形成された丘陵上の石敷遺跡の周辺などで確認されおり、雌鹿塚II式期から沖積平野部から山間地に対する積極的な開発の様子が分かるものである。その中で、潤井川中流域にありながら限られた沖積平野部に広がる泉遺跡は、特殊な意味を持つ遺跡として捉えられものと考えている。この遺跡では、雌鹿塚II式期の土器類が廃棄された環濠が発見されているのである。

今回の発掘調査で発見された土器の内、遠江の影響が窺われる類例（第10図-7）や地元の方から提供を受けた壺（第10図-9）などは、雌鹿塚II式期のもので、富士山麓に対する新たな開発の始まった頃のものではないかと思われるのである。

《文献》

- （財）浜松市文化協会『梶子遺跡Ⅶ』
富士市教育委員会1986『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』
富士宮市教育委員会1997『滝戸遺跡』

おわりに

滝戸遺跡では、今回の調査で新たな出土品が加わり、遺跡の内容の解明に給される貴重な歴史資料が提供された。この富士山西南麓において縄文時代の著名な遺跡として評価されている滝戸遺跡であり、その成果は大きなものである。

長期間に亘って営まれた集落遺跡の実態は、縄文時代から弥生時代、古墳時代までいろいろとその姿を変えながら変遷を示す。滝戸遺跡における調査は、個々の遺構の実態を検討する中で、それぞれの性格と領域が考えられる段階まで進んできている。第VI次の発掘調査として実施した今回の調査で発見された遺構、遺物の数々は、それを理解するために重要な情報を提示したものと考えられるのである。

挿 表

第1表 弁生土器観察表

番号	出土地点	埋蔵形態	型式	基高	口径	底径	基厚	文様・模様	胎土	焼成	色調	備考
1	BB2	立	—	—	—	—	—	外 文様(範文(HL)-星半輪)	きめがやや粗く、白色粒子が目立つ	良	(外)にぶい星 (内)にぶい黄	小破片
2	BB2	立	—	—	—	—	—	外 ナナメカット(7本/om)、斜肩火	細かい黒色粒子が目立つ	良	(外)にぶい星 (内)にぶい黄	小破片
3	BB2	立	—	—	—	—	—	外 ナナメカット(7本/om)、ナナメカット(7本/om)	きめがやや粗く、白色粒子を少量含む	良	(外)にぶい星 (内)にぶい黄	小破片
4	BB3	立	—	—	—	—	—	内 ヨコハケメ 内外面 斜付脚	白色粒子、白色砂粒を少量含む	良	にぶい赤褐	小破片、住居跡内二次焼跡
5	SB2.3	立	—	—	—	—	—	外 ナナメカット(7本/om)、内外面 斜付脚	白色砂粒、黑色粒子が目立つ	良	(外)にぶい星 (内)にぶい黄	小破片
6	表土中	裏?	—	—	—	—	—	外 タテハケメ(8本/om)不鮮明 内 ヨコナナメ	きめ細かく、白色砂粒が目立つ	良	(外)にぶい星 (内)にぶい黄	小破片
7	BB2.3	高坪	—	—	—	(8.8)	—	外 丹孔(23×6mm?)	白色砂粒、黑色砂粒を含む	良	(外)にぶい星 (内)にぶい黄	高坪脚部残片、西邊江系
8	BB2.3	立	広口盤A	—	—	—	—	外 総合部文様(範文(HL)) 内外面斜削	石英、白色砂粒、黑色砂粒を含む	やや軟	にぶい星	小破片、総合部盤口 盤部
9	表探	立	広口盤B	—	13.8	—	—	外 剥離面(7本/om) 内外面斜削	きめが細かく、白色砂粒、黑色砂粒 1mmの赤色粒子、白色粒子 剥離盤口底	良	にぶい黄	調査実施地探集、口 部盤片

※盤式は富士市教育委員会1997に因る。

第2表 織文土器観察表

番号	出土地点	埋蔵形態	型式	基高	口径	底径	基厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
10 A-1	深鉢形土器	縦縫系	—	—	—	—	0.8	追結爪彫文、円形竹管文	石、灰、タ-葉(少)	良	7.5YR5/8 明褐	
11 A-2	深鉢形土器	縦縫系	—	—	—	—	0.8	追結爪彫文、円形竹管文	石、灰、有、葉	SYR 4/4 にぶい赤褐		
12 A-1	深鉢形土器	縦縫系	—	—	—	—	1.0	追縫、追結爪彫文	石-長-葉(少)	良	7.5YR6/4 暗褐	
13 B-1	深鉢形土器	瓦錠ヶ台	—	—	—	—	0.8	半輪竹管文、刻文、純文	石-長(多)、青-葉(多)	良好	7.5YR5/5 明褐	
14 A-1, D-1.2	深鉢形土器	瓦錠ヶ台	—	—	—	—	1.5	鹿形、半輪竹管文、純文(LR)	石、灰、有、葉(少)、砂	良好	7.5YR5/4 にぶい赤褐	
15 B-2	深鉢形土器	五條ヶ台	—	—	—	—	0.8	範文RL	石-灰(少)、有	やや軟	7.5YR3/2 黒褐	
16 B-1	深鉢形土器	五條ヶ台	—	—	—	—	0.8	半輪竹管状沈緑、範文LR	石-長(微)、灰、葉	良好	7.5YR5/4 にぶい赤褐	
17 A-2	深鉢形土器	五條ヶ台	—	—	—	—	0.9	半輪竹管状沈緑、範文LR	石、灰、有、砂	良好	7.5YR4/3 黒	
18 A-2	深鉢形土器	五條ヶ台	—	—	—	—	1.0	引削追削斜刃、三角形追削斜刃	石-長-有(多)	良好	7.5YR5/3 にぶい赤褐	
19 A-2	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.2	追縫、追縫文	石、灰、有、葉(少)	良	7.5YR3/2 黒褐	
20 A-1	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.2	追縫(横縫題面)、絞状紋	石、灰、有、砂	良好	10YR4/2 底黒褐	
21 A-1, B-2	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.0	追縫、絞状文	石、灰、葉、砂	良好	7.5YR3/3 墓赤褐	
22 B-1	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.0	直縫帶、追八文	石、灰、有、葉(少)	良好	7.5YR4/2 黒褐	
23 B-1	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.0	直縫帶、追八文	石、灰、有、葉、砂	良好	7.5YR4/2 黒褐	
24 A-1	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.0	直縫帶、追八文	石-長-有(多)、葉	良好	7.5YR3/3 にぶい赤褐	
25 A-1	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.0	直縫、追八文	石-長(多)、有、葉	良好	7.5YR3/3 にぶい赤褐	
26 B-1	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.0	直縫、追八文	石-長-有(多)、葉	良好	7.5YR5/4 にぶい赤褐	
27 B-1	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.2	直縫	石、灰、有	良好	7.5YR4/4 にぶい赤褐	
28 A-1.2	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.3	直縫、擦捺状文	石、灰、有	良好	7.5YR4/4 にぶい赤褐	
29 A-1	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.5	直縫	石、灰、有、砂(少)	良好	7.5YR5/4 にぶい赤褐	
30 A-1	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.1	直縫、追八文	石-長(多)、有、葉、砂	良好	7.5YR5/3 にぶい赤褐	
31 A-2	深鉢形土器	加曾利	—	—	—	—	1.0	直縫、純文RL	石、灰、有、砂	良好	7.5YR5/6 明赤褐	
32 A-1	深鉢形土器	加曾利	—	—	—	—	1.2	直縫、純文	石-長(少)、有、砂	良好	7.5YR6/6 黒	
33 D-2	深鉢形土器	加曾利	—	—	—	—	1.1	範文RL	石-長(少)、有、砂	良好	7.5YR3/3 墓赤褐	
34 A-2	深鉢形土器	北尾款	—	—	—	—	0.5	直縫、絞状文	石-長-有(少)	良好	7.5YR5/2 にぶい赤褐	
35 C-2	深鉢形土器	北尾款	—	—	—	—	0.5	直縫、絞状文	石、灰、有(少)、葉	良好	7.5YR5/2 黒褐	
36 E-1	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.1	範文RL	石、灰、有、砂	良好	10YR4/2 にぶい赤褐	
37 A-1	深鉢形土器	曾利	—	—	—	—	1.5	直縫文、波状指輪、純文RL	石-長(多)、有、砂	良好	7.5YR5/2 灰	

39 A-2	深鉢形土器	曾利	-	-	-	0.7	器子目文	石・長(短)、有(砂)	良好	7.5YR6/4	にぶい粒		
40 C-2	深鉢形土器	曾利	-	-	-	1.4	施錆(刻目付直面、刻目付)、 直錆	石・長(多)、有、砂	良好	7.5YR6/4	黒		
41 J-1	深鉢形土器	曾利	-	-	-	1.5	施錆(刻目付)、直錆	石・長(多)、非	良好	7.5YR6/6	明暗		
42 SB5	深鉢形土器	曾利	-	-	-	0.7	施錆、縦目状文	石・長(少)、有	良好	SYR6/4	にぶい赤斑		
43 A-1, B-1	深鉢形土器	曾利	-	-	-	1.5	低錆等、縦目文	石、長、有、砂	良好	7.5YR6/4	にぶい粒		
44 B-2	深鉢形土器	曾利	-	-	-	1.2	施錆	石・長(少)、有、砂	良好	10YR7/4			
45 F-1	深鉢形土器	曾利	-	-	-	1.0	簡文R、施錆、刻実	石・長(少)、有	良好	7.5YR6/4	にぶい粒		
46 SX5	深鉢形土器	曾利	-	-	-	1.0	施錆、甲組竹管状波紋	石、長、有、赤、黒	良好	7.5YR6/6	黒		
47 A-2	深鉢形土器	曾利	-	(21.4)	-	0.7	施錆、刻実文	石、長、有、黒、砂	良	7.5YR6/6	穂	内面スズ付着	
48 SX1	深鉢形土器	曾利	-	-	-	1.5	条縫文	石、長(少)、有、赤、黒(少)、 砂	良	SYR6/4	にぶい赤斑		
49 B-1, 1.2	深鉢形土器	曾利	-	(31.3)	-	0.9	直錆	石・長(少)、有、赤、砂	良	7.5YR6/4	黒		
50 B-2	深鉢形土器	曾利	-	31.8	-	1	直錆、刻実文	石、長、有、赤、黒	良	7.5YR6/3	暗黒		
51 SX5	深鉢形土器	曾利	-	(29.9)	-	1.4	直錆、運八文	石・長(少)、砂	良好	2.5YR7/4	浅黄		
52 A-1	深鉢形土器	曾利	-	-	-	1.2	施錆、運八文	石、長(少)、有、赤、黒(少)、 砂	良好	10YR6/3	にぶい黒斑		
53 B-3	深鉢形土器	加曾利印	-	(29.5)	-	1.4	施錆、施直錆純文LR	石、長、有、赤、黒、砂	良	7.5YR6/6	黒		
54 B-1	深鉢形土器	加曾利印	-	-	-	1.3	施錆、施直錆純文LR	石、長、赤、黒、砂	良	7.5YR6/6	穂		
55 B-1	深鉢形土器	加曾利印	-	-	-	1.2	施錆、施直錆LR、施文RL	石・長(少)、有、黒(多)、砂	良	10YR6/3	にぶい赤斑		
A-1, 1.2	深鉢形土器	加曾利印	(13.6)	-	-	1.1	直錆、施文RL	石・長(多)、有、砂	良好	7.5YR6/6	穂	内面一部スズ付着	
SB2.3													
57 C-1	深鉢形土器	称名寺	-	-	-	1.3	施錆、施直錆純文LR	石、長、有、砂(多)	良好	SYR6/2	斑端		
58 E-1	深鉢形土器	称名寺	-	-	-	1.0	直錆、施直錆純文LR	石、長、有、砂(多)	良好	SYR6/3	にぶい赤斑		
59 E-2	深鉢形土器	称名寺	-	-	-	1.1	直錆、施直錆純文	石、長、有、砂(多)	良好	7.5YR6/3	暗端		
60 D-1, E-1, 1.2	深鉢形土器	称名寺	-	-	-	1.0	直錆、施直錆純文NR	石、長、有、砂	良好	7.5YR6/4	黒		
61 G-1	深鉢形土器	庭之内	-	-	-	1.7	施錆、附加条縫純文NR	石、長、有、砂	良好	7.5YR6/2	灰端		
62 F-1	深鉢形土器	庭之内	-	-	-	1.2	半幅直錆横皮筋、闊文R	石・長(少)、有、砂(多)	良好	7.5YR6/4	にぶい粒		
63 H-1	深鉢形土器	庭之内	-	-	-	0.8	直錆、施文RL	石、長、黒(少)	良好	SYR6/4	にぶい赤斑		
64 B-1	深鉢形土器	庭之内	-	-	-	1.4	直錆、施文LR	石・長(少)、有、砂(少)	良	7.5YR6/3	にぶい粒		
65 A-2	注口土器	庭之内	-	-	-	1.0	直錆、刻実、純文LR?	石、長、有、赤、黒	良好	SYR6/4	にぶい黒		
66 D-1	深鉢形土器	加曾利印	-	-	-	1.4	直錆、純文LR	石、長、有、砂	良	SYR6/2	暗端		
67 A-1, 1.2	浅鉢形土器	加曾利印	-	-	-	1.1	直錆	石、長、有、砂(多)	良好	7.5YR6/1	黒		
68 B-2	深鉢形土器	-	-	-	-	1.0	純文R	石・長(少)、有	良好	2.5YR6/3	にぶい赤斑		
69 E-1, 1.2	深鉢形土器	-	-	-	-	1.0	純文NR	石・長(少)、有	良好	SYR6/4	にぶい赤斑		
70 B-2	深鉢形土器	-	-	-	-	1.0	純文RL	石・長(多)、有	良好	7.5YR6/4	にぶい粒		
71 B-2	深鉢形土器	-	-	-	-	0.9	純文RL	石・長(少)、有、黒	やや軟	10YR2/2	暗端		
72 J-1	深鉢形土器	庭之内	-	-	-	0.5	直錆	石、長、有、砂	良好	SYR6/4	にぶい赤斑		
73 SB2.3	深鉢形土器	庭之内	-	-	-	0.8	直錆、刻実	石・長(少)、有、赤、砂	良好	7.5YR6/6	明暗		
74 B-1	深鉢形土器	庭之内	-	-	-	1.0	直錆、穿孔	石、長、有(少)	良好	7.5YR6/3	穂	全面磨き	
75 B-1	深鉢形土器	庭之内	-	-	-	1.0	純文R、直錆、刻実	石、長、有(少)	良好	SYR6/6	穂	内面に捺方向の擦き	
76 SB2.3	深鉢形土器	庭之内	(29.2)	-	-	1.0	直錆、貼付文	石・長(少)、有、赤、黒	良好	7.5YR7/6	度		
77 焼土中	深鉢形土器	庭之内	-	-	-	0.6	直錆	石、長、有(少)	良好	SYR6/2	赤端		
78 E-2	深鉢形土器	-	-	-	-	1.0	直錆	石、長、有、黒	良好	7.5YR6/2	暗端		
79 E-1	深鉢形土器	加曾利印?	-	-	-	0.7	直錆	石・長(多)、有、黒	良好	7.5YR6/2	穂		
80 H-1	-	-	-	(4.8)	0.8	純文NR	石、長、有、砂(多)	良好	SYR6/6	暗赤	底部		
81 D-1	-	-	-	(5.4)	0.5	純文R	石、長、有、砂(多)	良好	SYR6/6	暗赤	底部、内面外側研磨、外 面剥離、内面黒色化		
82 A-2	-	-	-	(12.5)	1.1				良	7.5YR7/2	暗褐灰	底部	
83 E-1	-	-	-	(9.8)	0.5				良	7.5YR6/6	穂		
84 D-1, 1.2	-	-	-	(8.0)	1.0	直錆	石、長、赤、砂	良	7.5YR6/3	にぶい穂	底部		
85 SB2.3	-	-	-	(10.0)	1.0				長、砂	やや軟	7.5YR6/6	穂	
86 A-1	-	-	-	(10.0)	1.2				石・長(多)、有、砂(多)	やや軟	7.5YR6/2	暗端	
87 B-1	-	-	-	(8.0)	1.0				石、長、砂	やや軟	7.5YR6/3	にぶい穂	底部
88 D-1	-	-	-	(9.0)	1.0				石、長、赤、砂	良	7.5YR6/6	穂	底部
89 C-1, 2	-	-	-	(7.0)	1.7				石・長(多)、有、砂(多)	やや軟	7.5YR6/4	にぶい穂	底部
90 E-1	-	-	-	(5.4)	0.8				石・長、有	良	SYR6/3	にぶい穂	底部

第3表 石器類観察表

番号	出土場所	器種	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
91	C-1	石鎌	I	黒曜岩	2.0	1.6	0.7	0.17	
92	B-1	石鎌	IIb	黒曜岩	1.4	1.4	0.2	0.45	
93	SX3(北壁)	尖頭器	-	頁岩	8.9	4.3	1.6	55	
94	A-1	石鎌	II	頁岩	5.6	4.2	1.1	27.5	
95	B-1	石鎌		頁岩	6.8	4.8	2.3	102.5	
96	表土中	敲石	I	頁岩	(9.2)	(3.9)	(2.4)	(98.5)	
97	D-1・2	敲石	I	頁岩	8.9	3.5	1.5	63.3	
98	表土中	敲石	II	頁岩	10.7	6.1	3.3	289.5	
99	SX3	敲石	IIc	-	12	9.3	5	865.5	
100	表土中	敲石	-	-	9.8	4.2		184.5	
101		磨製石斧	-	-	5.1	2.5	1	20	
102	表土中	打製石斧	Ia	砂岩	10.5	4.7	1.2	110	
103	北壁	打製石斧	Ia	砂岩	10	4.2	1.2	60	
104	C-1・2	打製石斧	Ia	砂岩	7.9	4.3	1.7	85	
105	SX5	打製石斧	Ia	砂岩	8.0	4.5	1.75	60	
106	B-1	打製石斧	Ic	頁岩	5.4	3.9	1.3	30	
107	SX3	打製石斧	-	頁岩	12.0	4.3	1.9	150	
108	C-2	打製石斧	IIa	砂岩	8.9	6.1	1.6	90	
109	B-1	打製石斧	IIb	砂岩	9	5.5	1.1	80	
110	G-1	打製石斧	IIa	砂岩	12.8	6.9	1.6	190	
111	G-1	打製石斧	IV	ホルンフェルス	12.9	9.9	3.5	415	
112	E-1・2	スクレイバー	Ia	砂岩	6.6	3.9	1	30	
113	C-1	スクレイバー	Ia	-	3.3	2.7		0.83	
114	SK2	石棒	-	-	38.3	12.2	10.1	9.3	
115	SK2	石棒	-	-	33.5	9.7	10.0	5.8	

第4表 土器片凹盤観察表

番号	出土場所	分類	長	巾	厚さ	重	色調	備考
116	D-1	I	4.1	3.3	1.0	17.8	5YR6/4 にぶい黄	
117	B-1	II	5.7	4.4	0.8	19.2	7.5YR6/3 にぶい褐	
118	E-1・2	III	4.1	4.1	1.0	19.9	2.5YR6/3 にぶい黄色	
119	B-1	II	4.4	3.2	0.9	14.9	7.5YR5/4 にぶい褐	
120	E-1・2	II	4.1	3.3	1.1	16.2	7.5YR5/4 にぶい明褐	
121	B-1	II	3.8	4.3	1.6	22.4	7.5YR6/6 橙	
122	SX5	II	3.8	4.0	1.1	22.9	7.5YR6/4 にぶい橙	
123	J-1	II	3.7	3.0	1.1	18.5	5YR6/4 にぶい橙	
124	表土中	II	3.4	3.0	0.9	13.9	7.5YR5/4 にぶい橙	
125	SB2.3	II	3.3	3.4	0.8	10.2	5YR6/4 にぶい橙	
126	南壁	II	3.3	2.9	0.9	13.4	7.5YR5/4 にぶい橙	
127	SB2.3	II	3.3	2.4	0.9	8.0	2.5YR5/4 にぶい赤褐	
128	E-1・2	II	3.2	3.2	1.0	9.0	5YR4/4 にぶい赤褐	
129	表土中	II	3.2	2.2	1.0	9.1	7.5YR6/6 橙	
130	D-1	II	3.1	2.8	1.0	11.0	7.5YR6/6 橙	
131	B-1	II	3.1	2.3	1.2	9.9	7.5YR4/4 褐	
132	D-2	II	3.0	3.7	1.0	12.2	2.5YR5/4 にぶい赤褐	
133	B-1	II	3.0	3.0	1.4	12.9	7.5YR6/3 にぶい褐	
134	B-1	II	3.0	3.3	1.1	18.8	7.5YR6/4 にぶい橙	
135	SX5	II	2.9	2.9	0.8	5.8	5YR4/4 にぶい赤褐	
136	B-1	II	2.9	2.8	0.8	7.7	5YR5/6 明赤褐	
137	E-1・2	II	2.9	2.5	1.0	8.7	7.5YR5/4 にぶい橙	
138	A-1	II	2.9	2.4	1.0	7.0	7.5YR5/4 にぶい橙	
139	A-1	II	2.6	2.2	0.9	6.2	5YR4/4 にぶい赤褐	

140	J-1	Ⅲ	4.8	4.5	1.0	32.1	5YR5/4 にぶい赤褐色	
141	SX5	Ⅲ	5.4	4.5	1.0	27.0	5YR5/3 にぶい赤褐色	
142	A-1	Ⅲ	4.1	3.9	1.0	22.8	5YR5/4 にぶい赤褐色	
143	表土中	Ⅲ	4.0	3.2	0.9	13.8	7.5YR6/3 にぶい赤褐色	
144	A-1	Ⅲ	3.6	3.6	0.9	16.0	5YR4/4 にぶい赤褐色	
145	B-1	Ⅲ	3.6	3.6	1.0	17.5	2.5YR3/1 暗赤灰色	
146	SB2.3	Ⅲ	3.4	3.2	0.9	10.8	10YR7/3 にぶい黄褐色	
147	D-1	Ⅲ	3.1	2.8	1.0	10.2	5YR6/4 にぶい橙	
148	B-1	Ⅲ	3.0	2.6	1.0	10.1	5YR4/4 にぶい赤褐色	
149	B-1	Ⅲ	2.9	2.8	0.9	8.3	7.5YR6/3 にぶい赤褐色	
150	表土中	Ⅲ	2.5	2.3	1.0	4.8	5YR5/6 明赤褐色	
151	SB2.3	Ⅲ	2.5	2.2	1.0	7.5	7.5YR6/4 にぶい橙	
152	B-1	Ⅲ	2.5	2.0	0.8	5.4	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	

第5表 土器片鱗観察表

番号	出土場所	分類	長	巾	厚	重	色調	備考
153	集石3 №2	Ⅱ	5.3	4.4	1.3	40.7	7.5YR6/4 にぶい橙	
154	集石1 №21	Ⅱ	2.8	4.4	1.0	15.6	7.5YR5/4 にぶい橙	

報告書抄録

ふりがな	たきど いせき							
書名	滝戸遺跡II							
副書名	主要地方道富士宮芝川線緊急交通改善事業工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第36集							
編著者名	渡井英誉、佐野恵里、澤柳幸司							
編集機関	富士宮市教育委員会							
所在地	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150番地 Tel.0544-22-1187 (文化課)							
発行年月日	平成19年3月23日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
滝戸遺跡	静岡県 富士宮市 野中615 番地先	22207	市番号 108 県番号 44	35° 13' 13"	138° 36' 13"	20061005 ~ 20061130	160m ²	主要地方 道富士宮 芝川線緊 急交通改 善事業工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
滝戸遺跡	集落・ 古墳・墓	縄文時代 前～後期	集石6・集石土坑1・ 石棒埋納土坑1・ 焼土坑1	土器・石器・ 土器片円盤・ 土器片鍾・石棒		石棒埋納土坑の発見		
		弥生時代 後期	住居4	土器				

富士宮市文化財調査報告書 第36集

滝戸遺跡 II

平成19年3月23日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150番地

(0544) 22-1111㈹

印刷 三鷹美術印刷株式会社

〒418-0056

富士宮市西町1番15号

(0544) 26-3636㈹

圖 版

図版 1 調査区近景



図版 2 SK2検出状況



図版 3 調査区全景



図版 4 SB1検出状況



図版 5 SB2・3検出状況



図版 6 SB4柱穴調査状況



図版 7 SX1検出状況



図版 8 SX1半裁状況



図版 9 S X3検出状況



図版 10 SK1検出状況



図版 11 S X5検出状況



図版 12 S X5調査状況



図版 13 S X 6検出状況



図版 14 採集土器 (第10図 9)



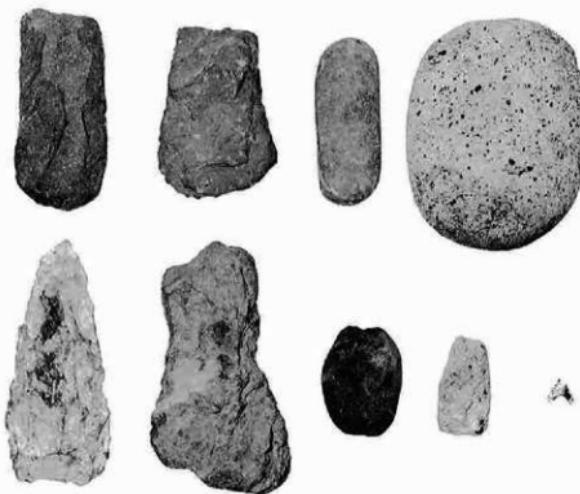
図版 15 出土縄文土器（第22図46）



図版 16 出土縄文土器（第25図75）



図版 17 出土石器



図版 18 SK2出土石器（第29図）

